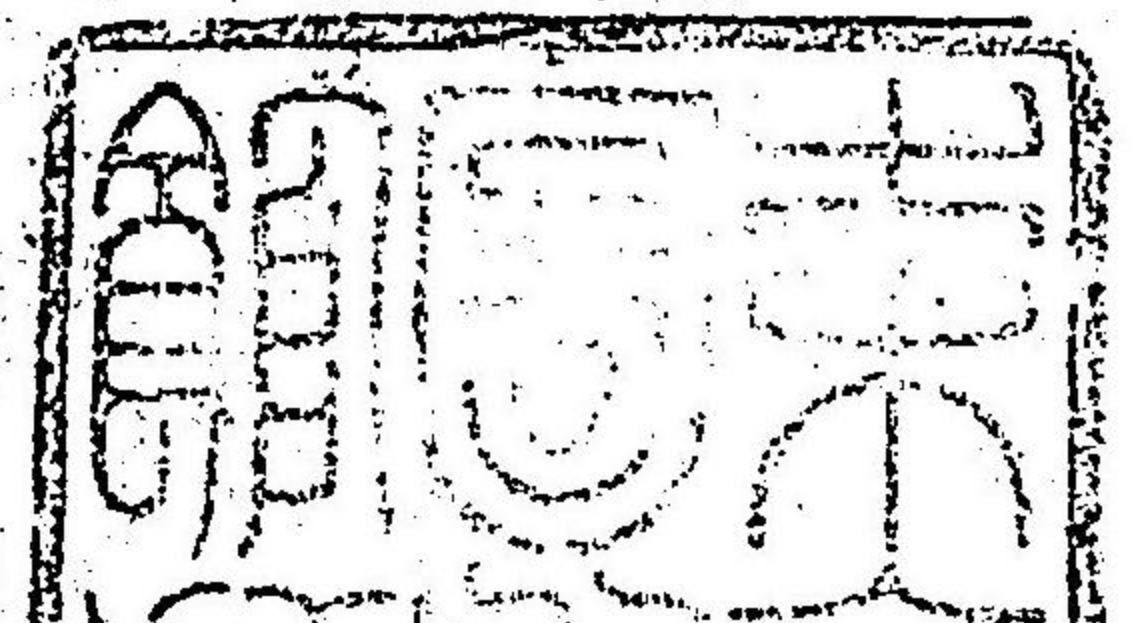


大和田建樹編
謡曲通解 第一卷

東京圖書館			
冊	號	函	類
門			

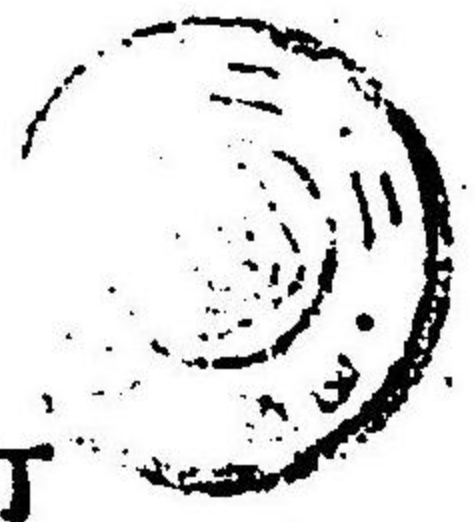
No. 111/117



謡曲通解首卷目次

總論

歌舞の起原.....	一	丁
猿樂の起原.....	三	丁
能の大成.....	六	丁
能の作者.....	七	丁
明和の改正.....	九	丁
能の組織.....	十	丁
能の興味.....	十一	丁
謡の文學上價值.....	十三	丁
通解の由來.....	十五	丁



謡曲通解 第一卷 目次

凡例.....十七丁

○高砂.....一丁

○田村.....八丁

東北.....十六丁

道成寺.....二十一丁

鶴龜.....二十七丁

實盛.....二十八丁

○熊野.....三十八丁

卒都婆小町.....四十八丁

○羽衣.....五十五丁

竹生島.....六十一丁

○景清.....六十六丁

班女.....七十六丁

小袖曾我.....八十三丁

右近.....九十一丁

○邯鄲.....九十七丁

千手.....百三十三丁

遊行柳.....百一十一丁

室君.....百十八丁

張良.....百二十丁

朝長.....百二十五丁

野宮.....百三十五丁

仲光.....百四十一丁

土蜘蛛	百五十一丁
小鹽	百五十六丁
小督	百六十二丁
大原御幸	百六十九丁
一百万	百七十九丁
船辨慶	百八十五丁
岩船	百九十四丁

謡曲通解首卷

大和田建樹 著

論 歌舞の起原

喜べば笑み哀しめば泣く。是れ人情なり。我上ならでも人の喜ぶを見て笑み哀しむを聞き
て泣く。是れまた人情なり。歌舞の起れるはこゝに基するのみ。我國の上古を尋ねるに、事に
關れて起る大々の感情を簡單なる樂器に合はせて謠ひ、之に應じて手を拍ち木の枝を持
ちて舞ふ事などは、早くよりありき。かくて其譜も精密に定まり歌の詞も調ひたるは、奈良
朝の末、平安京のはじめ頃なるべし。是は専ら朝廷の上に行はれて、神事儀式の用具となり、
唐土三韓の樂曲とも親しく和合して大成せしに因るなり。
然れども其詞はと云へば、

笹の葉に雪ふりつもる冬の夜に

聖の遊びをするが樂しき神樂 又は、

あな尊と今日の尊とさや

いにしへもかくやありけん

今日の尊とさ馬盤樂

又やと降りては、

蓬萊山には千年ふる

萬歳千秋かさなれり

松の枝には鶴巢ぐひ

巖がそばには龜遊ぶ五節同 野曲

などの如く、極めて簡單なる一時の感情を述ぶるに過ぎざれば、太古質朴の遺風としては餘韻けだかく十分愛し味ふに足るべけれど、世態繁忙に移り人情複雑に趣くまゝに、これのみにては自らも満足し他をも満足せしめざるに至れり、よりて足利の頃に曲舞といふもの起る、曲舞には或は忠臣孝子の事蹟を作り、或は名所舊跡の景色を寫しなどして、感情長く思想密なれば、歌も舞も一時さかんに行はれたり、今の謡曲のツセに就きて其一斑を

見るべし、

然れども酒を得て肴を望むは人情の免かれがたき所なれば、室町の頃に至りて此曲舞の詞に前を加へ後を繼ぎ足して、終に古來の歌舞を一變し當時武士の人情に適して、永久不滅の猿樂といふものを作り始めたり、此前にも盲人の琵琶もて語る平家物語あり、其外白拍子の舞、幸若の舞、田樂の能などを始めとして、種々のものも起りしかど、或は曲ありて舞の無き爲め、或は舞曲どもに不精密なりしたため、此猿樂に壓倒せられて、謂はゆる劣敗せしは、全く人情と時好とが此猿樂に忠ありしに因るべき、人情時好を忠ならしめしは、とりもなほさず猿樂の天下に覇たるべき威望ありしにこそ因るなれ。

○猿樂の起原

猿樂は猿樂の能とも略してはたゞ能とも稱ふ、之に用ふる歌曲を謡または謡曲と稱ふるなり、さて此猿樂の發達せし様は如何にと云ふに、伊勢には和屋、藤田、主内の三座ありて、太神宮に奉仕し、近江には山階、下坂、比叡の三座ありて、日吉の社に奉仕し、丹波には本座、河内には新座、攝津には法成寺の三座ありて、加茂住吉の社に奉仕し、奈良には圓滿井まんだら今の今春ゆき結崎ゆきざき今の觀世くわんせい外山とやま今の寶生坂たからざか今の金剛こんごうの四座ありて、春日の社に奉仕したのく、我社の神事に猿樂を奏して神慮をすかしむるを業とせしと云へり、此時の猿樂は世俗に行

はるゝ神樂の類にて品よきものなりしならん。今も猿樂太夫の神祕とする翁千歳三番叟の舞は尤も古き曲にて、翁は太神宮を表し、千歳は戸隠大明神三番叟は、任吉明神を表したりとも云ひ傳ふるなり。此外には岩戸びらき、大蛇退治などの如く神代紀に基づくもの、又は社々の縁起を作れるものがねひくに行はれしならんとす。思はるゝ之を第一期すなはち神事能の起原とす。

室町將軍の時の結崎家に次郎(觀阿彌清次)と云ふありて、此藝のため將軍に抱へられ、其子左衛門太夫(世阿彌元清)も繼いで寵を承く。是より古作を増補し新作を擴張して猿樂の進歩を圖る針路を得しかば、節定まり舞整ひて世に行はるゝ事も著しく、遂に將軍家の音樂と爲りて儀式に用ひらるゝ事かの神樂催馬樂の朝廷に用ひられし如き勢を成したる。前は既に神事に用ひられたり、神前に祈るに、天下泰平武運長久を主とす。後は更に將軍家に用ひられたり、將軍家は、君のため國のため世のため民のために、之を祈り之を祝ふ心を儀式に表はさるべからず。されば松竹梅鶴龜に寄せ神佛仙人に寄せて祝言を奏する曲起る。之を第二期すなはち祝言能の起原とす。

節と舞との作こそ悉く其専門家の手には出でたれ、文句の作者は多く當時の文人歌人なりし事疑ふ可からず。其文人歌人と云ふも、過半は佛門の人か、さなくとも佛法の信徒たりしには相違なければ、其腦裏にはたゞ佛あるのみ、されば花も紅葉も悉皆成佛の縁とながめ、風聲水音も御法の響と聞きなすのみかは、親子の愛を述べても觀音の大慈悲を説き、英雄の末路を語りても因果應報の理を説くを主とするは、自然の勢なり。其うへ當時文學の種は全く僧徒の手に歸しはてたりしかば、學問する者皆これを師として怪しまず、況んや殺伐を事とし争鬪を棄とせし亂世の餘風とて、武人はすべて粗暴殘酷なるやうに見ゆれど、深更夢さめて靜に思はば、或は無益の殺生を悔ゆるもあるべく、却りて反勸の女々しき感情に制せられて佛門に歸依する例すくなからず。能と謡とは之を慰めつゝ説法する事の上手なるものなり、よりて佛法を主とせし作れこる。之を第三期すなはち幽靈能精靈能の起原とす。

上の神事祝言佛法の三種は爲にする處ありて起れるなれば、見る人聞く人をまだ十分に満足せしめ難き場合もあるべし、よりて勸懲の意を含める人情ものゝ作れこる。之を第四期すなはち現在物の起原とす。

さはいへど、此四期かならずしも斯かる順序にのみ成り立ちたるとは定めがたく、たゞ當時人心の向ひし處、能の人心と共に發達せし様を謂へるのみ、中にも第三期の佛法を主とせし精神は、能の全体をほとんど蓋ふはどにて、つひに能と佛法とは離れざる如き感あ

しめしば是また他の美術とも伴なひて當時の時勢を代表せしに依るなり。それを明治今日心の心もて批難する輩は、保元平治の軍に甲冑弓矢を用ひしを笑ふに似て、歴史の時代をも辨へぬ論と云ひまし、まして能と謡の趣味佳境はこゝに在る事かの佛畫佛像が美術の主眼を占むるを見ても曉るべきなり。

○能の大成

能のはじめて完備せしは室町將軍の時に在る事すでに云へり。東山將軍の頃に至りてますます隆盛を極め、かの春日の四座は觀世結崎保生外山、後には寶生今春圓滿井金剛(坂戸)と改姓してたのく流儀を分ち、此道に従事して四座の太夫と呼ばれたり、かくて尤も將軍家に用ひられたるは觀世なりしと云ふ。

然れども、かのく分れて一流を爲す毎に、觀世の作に出でたるものも文句を改め節を替へなどして互に異同を生じたり。之を大別して觀世寶生を上掛謡と稱へ、今春金剛を下掛謡と稱へて、謡本を別つに至れり。今も其文句と節とを比較して見れば、觀世寶生の相似よりたるは、今春金剛の相似よりたるが如き親密の關係あるを見いだすべし。

豊臣秀吉はいたく此道を好みて自身も常にせられしかば、芳野蘭、高野參詣、明智討、柴田、北條など云ふ新作も出來たる程なりき。其頃喜多七太夫と云ふもの、金剛の弟子なりしが、上

手なりとて秀吉の氣に入り、抱へられて家を興せり。是より喜多流下掛りに加はりて五座と爲りぬ。

徳川氏の時に至りても、ますます將軍家に用ひられて、正月三日の謡初式を始めとし、將軍宣下の祝と云ひ勅使發應と云ひ、重き式樂と爲りて品格を高め、むしろ美術として味ふよりも、武士のすべき一藝として幼稚の時より習はせたる有様なりき。されば之を呼ぶにも御能と云ひ御謡と云ひて、他の遊藝などと等しなみに考へざりしも故ありけり。

○能の作者

能の水上演る曲舞は、もと芭蕉東北源氏供養錦木以下十六番ありて、圓滿井座に出でたりとは傳ふれど、たしかに其作者を知りがたし、今の一完備の謡曲を組み立てたるは實に結崎清次父子に始まれるなり。但し此作者と云ふは、文句に節を附けて謡ふべく舞ふべき様に作れる人の事にて、歌詞の作者には非ざれど、その節附の時代は、やがて歌詞の成れる時代に遠からぬを知るべければ、こゝに擧げて本文の参考に備へん、名のみ傳はりて生死傳記の欠けたるもあるは遺憾あるとせん方なし。

結崎治部素清次 幼名は觀世丸のち三郎と稱す。落髮して觀阿彌宗音と號す。應

永十三年五月十五日没す。歳五十二。

結崎左衛門太夫素元清 清次の長男なり。幼名は藤若丸のち三郎。落髪して世阿彌宗全と號す。康正元年七月二日没す。歳八十一。

金春式部太夫素氏信 元清の掣なり。始の名は彌三郎。落髪して禪竹と號す。

結崎十郎素元雅 元清の長男なり。長祿三年十月九日没す。歳六十五。

日吉四郎次郎安清 佐阿彌と號す。長祿二年八月四日没す。歳七十六。

金春八郎素元安 氏信の孫あり。禪風と號す。

觀世小次郎素信光 清次の孫。元清の甥なり。父は觀世音阿彌元重。永正十三年七月七日没す。歳八十餘。

觀世彌次郎素長俊 信光の長男なり。天文十年没す。歳五十三。

外山又五郎吉廣 以下傳記未詳

宮増某 脇師なりと云ふ。

龜阿彌

與江元久

江波左衛門 五郎と稱す。

内藤左衛門 のち河内守と稱す。

井阿彌

竹田法印宗盛

福來某

小田切能登

觀世左近太夫元章 清次より十五代目なり。

始は三十郎と稱し。名を清温と云へり。安永三年正月十八日没す。歳五十三。

○明和の改正

十五代觀世太夫元章は學識あり。此道に執心ふかき人なりしかば。從來の諸曲を改正して。明和年間に上本せり。世に之を明和の改正とも改正本とも云ふ。一例を示さば。從來の草紙洗には大伴黒主を悪人の如く作れるを嫌ひて。かの萬葉集に入筆せしは全く一時の糺れなれば。實は小町が歌なる事を裏書して。洗ひたる後に顯はさんとの意に作り直したる類もあり。そもく。此明和の頃は恰も國學の興りたる時にて。萬葉調の古文流行し。古實考證の學問争ひ開けたる折なれば。其風潮が諸曲をも刺激せしものならん。加茂真淵翁の萬葉考をはじめ。唯いにしへに泥みて。今本は誤謬なり。後世の詞は古意に合はずと。私に改正する事が行はれし。影響を蒙りたるならん。萬葉古事記は上古の物あれば。上古に復して改め

讀まんもよかるべけれど、謡曲は近古の物なれば、謂はゆる俗意俗調なるが却つて其の雅意雅調にかなへる價值のある處なり。そのうへ既に成り立ちたる物をこゝかして削り改むるは、到底原文に勝らずして止むが習なり。さればにや元章一代にて又もどにかへり、改正本の行はるゝ時は終に無かりしなり。然れども字句の誤れるを正し、誤り訛れるを直しなどして、文學上に親密の關係をつけしは、改正本の功もつども多きに居る。改正本の業取れしとて其功を傷つくるに足らず。

○能の組織

能は所作を主とするものにあらす。謡を本として之を所作にあらはすのみなれば、所作すなはち舞の形の従あるが故に、或は我する所爲を、

舟人どもづなれし切つて、舟を深みにれし出だす。

と舟人自らにいはしむる事あり。この類常にれはし。又幽霊いでゝ昔語をするとても、

屢より横笛ぬきいだし。

と笛を吹く所作をするなど、實際ならずとて非難するもあれど、是は謡を身振にあらはしてうたふものなる事知らぬに出づるなれば、幼き論のみ。然れども所作のなき所は、謡もて之を補はざるべからず。道行の如きは所作にあらはしが

たく、舟を棹さし潮を汲むなどの處は、見渡す風景を文句に述べて補ひたる類これなり。

○能の興味

能は歌舞なり、歌舞は美術なり、美術の目的は、人間の感情を高尙に趣くるに在れば、能の妙味もこゝに存する事を思はざるべからず。そも、美術に要する性質は三種あり。曰くけだかくすべき事、曰く美しくすべき事、曰く大きくすべき事。これなり。けだかくとは、劇法師に。

花をさへ、受くる施行のいろく、にははひ來にけり梅衣の、(下略)

といひて乞食の様を品よく述べ、雲雀山に、

頃を得て、咲く卵の花の杜若、ひらさき染むる山草の、色香にめで、花めされ候へ。

と云ひて乳母が生活に苦しむ様を卑しからず寫したる類を云ふ。

美しくとは、仲光に、

開討ちに現なき、我子を夢となしにけり。

と死したる様を隠して云ひ、櫻川に、

こゝに又名に流れたる櫻川とて、さもかもしろき名所あり、別れし子の名も櫻

子なればかたみと云ひをりからと云ひ名もなつかしき櫻川に散り浮く花の
雪を汲みて自ら花衣の春のかたみ残さん。

と云ひて狂女のやつれたる襟を落花を假りて美しく述べたるを云ふ。

大きくとは羽衣に。

いや疑ひは人間に在り天に偽りなきものを。

といひて侵すべからざる天人の神聖をあらはし國栖に。

其上この山は都卒の内院にもたとへ又五台山しやうりやうせんとてもろこ
しまでも遠くつゞける吉野山かくれが多き處なるをいづくまで尋ね給ふべ
きすみやかに歸り給へ。

とて敵兵を追ひ歸す老翁の人間ならぬ處を示し又舟をも捜さんと云ふに答へて。

何と舟を捜さうとや獵師の身にては舟を捜されたるも家を捜されたるも同
じ事すかし身こそ卑しく思ふとも此處にては翁もにつくき者すかし孫もわ
り彦もあり山々谷々の者どもいで合ひてあの狼籍人を討ちとり候へ。

といひていよく神ざひたる様を見せたる類を云ふ能の優れたる點の此三つの性質を
含むにあらざるなりなほ云はと。

都をいでとさよ波や志賀の浦舟こがれ行く末はあらちの山こけて袖に露ち
る玉江の橋かけて未ある越路の旅おもひやるこそ趣かなれ梢なみたつ瀬こ
しの安宅の松のゆふけむり消えぬうき身の罪を切る彌陀の餅の彌波山雲路
うながす三越路の國の末なる里とへばいとど都はとほざかる境川にも着き
にけり。

と數行の文字に幾日幾十里の旅情を述べ。

散らぬさきにと尋ね行く花をや風の誘ふらん。

また。

花の跡とよ松風や雪にもうらみなるらん。

など云ひてわづか四句の内にもものによそへて身の感慨をあらはすなど他の文章にて見
るべからざる特點を備へたるは味ふまゝにこれのつから知られなんこれのみにいどま
らずこゝには注意を促がさんために九牛が一毛の例を擧ぐると知るべし。

○ 諸の文學上價直

文學者は誰も曰ふ奈良朝文學の代表は萬葉王朝文學の代表は源氏なりと余はこれに續
ぎて近古文學の代表は諸曲なりと曰ふそもく思想自由にして言語に富み漢文和文

相したしみて極端に走らず言文の隔いちじるしからずして活潑壯大の氣みちくたりしは、全く此時代にあり、かくて諸曲はこれを代表したるものなり。

漢語は漢學と共に早く入り込みて居たりしかど、伊勢源氏の時代には、さほど和文と親密ならざりしに、これに反して明治の今日を見れば、或は漢語のために和文の領分をも蓋はれんとする傾きあり、今人はいづれにかよるべき、古へに癖すれば弱きに失し、今に従へば亂雑に流る、これが中庸を得て標準を示すものは、近古の名文、殊には諸曲の文章に於けるべき、これ優れたる一つ。

世に言文一致の論者あり、ひたすら文章鄙猥の俗語にまで引き下さんどす、是は實際行ひやすく便利なるには似たれど、日本語の保存に對して好ましき事なるか、文學上の文字に對して喜ばしき事あるか、輕々しくは信じがたし、世に又古文偏信の論者あり、一心に文章を言語多からざりし古代に引き上さんどす、是は迂遠取るに足らざる論なれど、純粹日本語に對しては忠なるに似たり、されど是も好古専門家の外には學びて益なし、さらば如何すべきと云ふに、言語をば文章に近づけ、文章をば言語に近づけん、とつとむべし、然せば言語はこれづから位を高め、文章はこれづから平易にならん、諸曲中對話の詞は此目的を示したるものとぞ信ずる、これ優れたる二つ。

日本の文章に句讀法なしと人も云ひ我も思へり、祝詞宣命は眞淵宣長兩大家の註、源氏枕の草紙は季吟の抄によりて行はるれども、實は當時學者の句讀法は如何ありけん知るべからず、然るに諸曲はひとり其法を傳へて作者意中の對話を聞くべく、彼來文を學ぶ者の模範たらしむるは、言語の化石たる歌舞にもなへばなり、これ優れたる三つ。

○通解の由來

余は諸曲を好む者なり、歌舞の美術としてののみならず、文學上に好む者なり、之を文學世界に弘めんと望む事久し、或は生徒に向ひ其文義妙處を講釋せし事もありき、通解の成れるは一朝一夕の故にあらず、昔は諸曲の註釋かれこれありて上木せられし中に、優れて委しきは諸曲拾葉抄なり、されば此書を再板して其遺れるを拾はば如何と云ふ者あれど、さばゆかぬ道理あり、誰も知るならん、古文の註釋つくるは讀者を満足せしめんためならずや、然らばむかしの拾葉抄は、明治の讀者にはさばめて不適當不満足なるを知る、通解の成れるは偶然の筆ずさびにあらず。

凡例

- 一 流義によりて文句の異同を一々に擧げんはわづらはしければ其行はるゝ廣きによりて觀世流の謄本を主とす但し文句はあながちに今本のみによらず。
- 二 毎卷に擧ぐる曲の順序ハ便宜にまかせて私に設くたゞ脇能と祝言能とを首尾に置きたるは能の古實を失はじとの意のみ。
- 三 次第道行詞一聲サシ歌ソリソセロンギウカ等はうたひ方の名なり文章としては必用なきに似たれど謄曲に通じたる讀者の便をはかりて其まゝに除かず。
- 四 シテウキツレトモ子方狂言等は役の名なり地ハ地謄とて記者の文章をうたふものを云ふ是等も元のまゝに存しれ。
- 五 同じ文句を二度うたふを返しと稱ふこれには意味に必用のもので節だけに必用のものであり節だけのものは皆はぶ。
- 六 狂言の詞を入れたるとヤカクとして略したるとあり謄本によるのみ。
- 七 傍の假名は讀みにくきものと二様に讀まるゝものとに附く。
- 八 同じ詞の註釋は一度出でたるものは二度いはぬもあり二度も三度も同じ様に云ひたるもありまた實盛に云ふよりも忠度に云ふが分りよしと思ふ時は初度に云

序。正木のつらは萬の名にて
木にいひけたり。

松の奇特 奇特は不思議に同

出でしほの 舟の出づる月の
出づるを離れて出潮に目
波の淡路 波の淡しきに掛け
たり。

とへなりける常磐木の。中よも名は高砂の。末代のためじよも。
相生の松ぞめでたき。

ロンギ地「げよ名を得たる松が枝の。老木の昔あらはして。その名
を名のり給へや。シテッレ「今は何をかつよむべき。是は高砂住の
江の。相生の松の精。地「夫婦と現む来りたり。地「ふーさやさて
は名どころの。松の奇特をあらはして。シテッレ「草木こころなけ
れども。地「かーこき世とて。シテッレ「草も木も。地「わが大君の國
なれば。いつまでも君が代よ。住吉にまづ行きて。あれにて待ち
申さんと。夕波のみぎはなる。海人の小舟よりうち乗りて。追風
よまかせつよ。沖の方より出でけりや。沖の方よりいでよけり。
ワキ歌「高砂や。此浦舟帆をあげて。月もろともに出でしほの。
波の淡路の島陰や。遠くなるをの沖すさて。はや住の江よ着き
にけり。」

のれ見ても久しくなりぬ住吉の岸
の松はいくよへらん 伊勢物
ひけり「音みど住吉に行幸し給
其次に「御神現形」給ひて「さあ
りて。左の歌あり。
むつましと君は知らずや瑞籬の久
しき世よりいひそめてよ
意は我が久しき古より朝廷を祝
ひ守りて在ると隠し我なりと
天皇は知るしよさしにやなりと
り。瑞籬は久しきの祝詞。
すましめ 神宮と清むる事。
宮つこ 神宮と云ふ。
西の海やあまの原の潮路よりあ
らはれ出でし住吉の神。横吉
今集の歌。あまの原は日向に
て住吉の神の生れ給ひし土地。
潮路よりこれに波間よりよして
引きたり。
のんの雪 瑞籬に同じ。
あまの海 住吉の邊にあり。
侍三松根 而摩千年来。瑞籬
手。折梅佐。而摩千年来。二月の雪
影。衣。本朝文神にある文。云
影。向。神のあらはれ給ふと云
御影を拜む 月の縁にて賀は神
青波 豊満調の樂名。
遺城 太倉調の樂名。遺城の
字。都に瑞籬の取れり。遺城の
小忌衣 神事にあつかる公禱の
祭服。
さすかひな さいは舞の手の
とさむる手 これも舞の手の

後「われ見ても久しくなりぬ住吉の。岸の姫松いくよ經ぬら
ん。むつましと君は知らずや瑞籬の。久しき世々の神かぐら。夜
の鼓の拍子を揃へて。すましめ給へ宮つこたら。地「西の海。あま
きが原の波間より。シテ「あらはれ出でし神松の。春なれやのこ
んの雪の朝香がた。地「玉藻かるなる岸陰の。シテ「松根によつて
腰をすれば。地「千年の縁手よ満てり。シテ「梅花を折つて頭にさ
せば。地「二月の雪ころもよ落つ。

ロンギ地「ありがたの影向や。月すみよの神遊。御影を拜むあら
たさよ。シテ「げにさまよの舞姫の。聲もすむなり住の江の。松
影もうつるなる。青海波とはこれやらん。地「神と君との道すぐに。
都の春よゆくべくは。シテ「それぞ還城樂の舞。地「さて萬歳の
「小忌衣。地「さすかひには悪魔を拂ひ。ささむる手よは壽福をい
だき。千秋樂は民を撫で。萬歳樂にはいのちを延ぶ。相生の松風

大徳の御願なり。昔大和の國子島寺といふ所に。賢
格に造るの意。草創ははじめて大
子島寺。高市郡にあり。
沙門の觀世音。觀音のせん姿と
正身の觀世音。觀音のせん姿と
こつかに同下。今水津川といふ川な
り。山城相樂郡にあり。

檀那を施す。梵語なり。施主と譯す。財
加藍を施す。梵語なり。田村丸と譯す。財
今もその云々。今もその云々。今もその云々。
の深き誓ひの數々。千手の御手のとりど
り。さまざまの誓ひあまねくて。國土萬民をもちとむ。大悲の
影ぞありがたき。げよや安樂世界より。今この娑婆に示現して。
我らが爲の觀世音。あふぐも愚なるべしや。
ワキ詞「近頃れもろき人參りあひて候ふ物かな。又みえわた
りたるは皆名所よてぞ候ふらん御教へ候へ。」シテ詞「さん候ふみな

檀那を施す。梵語なり。施主と譯す。財
加藍を施す。梵語なり。田村丸と譯す。財
今もその云々。今もその云々。今もその云々。
の深き誓ひの數々。千手の御手のとりど
り。さまざまの誓ひあまねくて。國土萬民をもちとむ。大悲の
影ぞありがたき。げよや安樂世界より。今この娑婆に示現して。
我らが爲の觀世音。あふぐも愚なるべしや。
ワキ詞「近頃れもろき人參りあひて候ふ物かな。又みえわた
りたるは皆名所よてぞ候ふらん御教へ候へ。」シテ詞「さん候ふみな

塔婆。佛骨を埋む所の塔婆と名
つくと佛骨にあらば。こは高
清閑寺本堂の北にあり。陵は高

上見ぬ鷲の尾の寺。上見ぬ鷲の尾の寺
の序なり。鷲は虚空に高くのぼ
りつめて我の上に見る處なけれ
ば。鷲の尾の寺は。これならんぞ
ひしが。ありし。これならんぞ
眼に云へり。やは鷲の尾の寺。
いと惜しけれ。景色の好きた
めに時と惜しむ心。

春雲一刻價千金。蘇東坡の時に春
有。一刻價千金。花石清香二月
さうふ花をつれて。夜嵐にさう
はるく花を共に。心もうたれて散
るならんぞなり。さやうに花
さぞな名にしむ。時めくは時に合
時めける粧ひ。時めくは時に合
うて笑ゆると云ふ。粧ひは景色
の美しきと云ふ。音羽の音に云ひ
風のどかある。音羽の音に云ひ

創。坂上の田村丸の御願なり。昔大和の國子島寺といふ所に。賢
心といへる沙門。正身の觀世音を拜まんと誓ひしに。ある時こ
つのはの川上より金色の光さしを。尋ね登つて見れば一人の
老翁あり。かの翁かたつていはく。我は是れ行教居士といへり。
汝一人の檀那をまち。大伽藍を建立すべしとて。東をさしてと
ひ去りぬ。されば行教居士といつば。これ觀音薩埵の御再誕。
又檀那をまてとありしは。是れ坂の上の田村丸。地「今もその。
名は流れたる清水の。深き誓ひの數々。千手の御手のとりど
り。さまざまの誓ひあまねくて。國土萬民をもちとむ。大悲の
影ぞありがたき。げよや安樂世界より。今この娑婆に示現して。
我らが爲の觀世音。あふぐも愚なるべしや。
ワキ詞「近頃れもろき人參りあひて候ふ物かな。又みえわた
りたるは皆名所よてぞ候ふらん御教へ候へ。」シテ詞「さん候ふみな

名所よて候ふ。御尋ね候へ教へ申候ふべし。ワキ「まづ南は當
つて塔婆のみえて候ふは。いかなる所よて候ふぞ。シテ「あれこ
そ歌の中山清閑寺。今熊野までみえて候へ。」ワキ「また北にあた
つて入相の聞え候ふは。いかなる御寺にて候ふぞ。シテ「あれは
上みぬ鷲の尾の寺。や。御尋ね候へ音羽の山の嶺よりも。いでた
る月のかゝやきて。この地主の櫻にうつる景色。まづくこれ
こそ御覽じごとなれ。ワキ「げよく是こそいと惜しけれ。こ
と心なき春の一時。シテ「げにをいむべし。ワキ「をいむべしや。
シテワキ「春雲一刻價千金。花は清香月に陰。シテ「げよ千金もか
へとはいま此時かや。地「あらく面白の地主の花の景色やな。
櫻の木のままにもる月の。雪もふる夜嵐の。さそふ花をつれて。あ
るや心なるらん。ワキ「さぞな名にけれふ。花の都の春の空。げに
時めける粧ひ。青楊の陰みどりにて。風のどかある。音羽の瀧

にのほりて鐘を引きつづきまじしけるが。つひに法力によりて蛇体と下失せける事と作れり。實事と影にして亡骸の執心と強せる事にしたるが能の眞味なり。

撞鐘退轉 かれには打つのもあ
 撞鐘 撞くのをば撞鐘と云ふ。
 退轉 中絶の意。
 供養 佛の祭とする事。こゝは鐘の出来たるによりての供養なり。
 能力 力役する僧の下人。
 鐘樓 鐘つき堂と云ふ。
 女人禁制 鐘つき堂と云ふ。女人の入ると禁する事。

白拍子 人に招かれて歌舞するを職業とせる女。

月はほごなく入沙の 道行なり。
 月の入るま入沙と云ふ。
 まだ暮れぬ 暮れぬから日が高
 ばしと云ふと寺の名に掛く。すなはち道成寺の事。

とがまて賜はり候へ このあ
 さいに狂言 女人禁制なれども舞
 をまうて見せなば内々に許すべし の意と云ふ。
 道成の外には これより舞になる。
 道成の痴 傳記詳ならず。

伽藍 田村にあり。

山寺の春の夕暮きて見れば入相の鐘に花ぞ散りける 山寺の春の夕の鐘に花ぞ散りける。
 新古今集の歌 山寺の春の夕の鐘に花ぞ散りける。
 月落烏啼霜滿天 江村の漁火愁對
 唐詩 江村の漁火愁對
 紅楓とあれ 江村は通例の本に

龍頭 鐘の綱を通す處。
 ひきつづきてぞ失せにける ひきつづきてぞ失せにける。
 の詞あり の詞あり。

せて候ふ。今日吉日にて候ふ程よ。かねの供養をいたさばやと存じ候ふ。いかよ能力。はや鐘をば鐘樓へ上げて有るか。狂言「さん候ふはや鐘樓へ上げて候ふ御覽候へ。ワキ「今日鐘の供養をいたさうするよて有るぞ。又さる子細有る間女人禁制よて有るぞ。かまひて一人も入れ候ふな。其分心得候へ。狂言「畏つて候ふ。

シテ次第「つくり罪も消えぬべ。鐘の供養よ参らん。サシ「是は此國のかたはらよ住む白拍子よて候ふ。詞「扱も道成寺と申す御寺よ。鐘の供養の御入り候ふ由申候ふ程よ。唯今参らばやと思ひ候ふ。歌「月は程なく入りほの。煙みちくる小松原。急ぐ心かまだ暮れね。日高の寺に着きよけり。詞「急ぎ候ふ程よ。日高の寺に着きて候ふ。やがて供養を拜まうするよて候ふ。

狂言「シカ〜。シテ「是は此國のかたはらよすむ白拍子よて候ふ。鐘の供養をそと舞をまひ候ふべ。供養ををがませて賜はり候へ。狂言「シカ〜。シテ「荒うれーや涯分舞をまひ候ふべ。うれーやさらば舞はんとて。あれよまよます宮人の。烏帽子をかぼし假に着て。既に拍子をすしめけり。次第「花の外よは松ばかり。暮れそめて鐘や響くらん。ワカ「道成の卿承り。始めて伽藍橋の。道なり興行の寺なればとて。道成寺とは名付けたりや。地「山寺のや。シテ「春の夕ぐれきてみれば。地「入相の鐘よ花ぞ散りける。シテ「さるほどよ寺々のかね。地「月落ち鳥鳴いて霜雪天よ。みちよほほどなくひたかの寺の。江村の漁火愁よ對して。人々眠ればよき障ぞと。立ち舞ふ様よてねらひよりて。つかんとせーが。思へば此鐘恨めーやとて。龍頭よ手をかけ飛ぶとぞみえー。ひきかづきてぞ失せよける。

熊野 ゆや

元清作

平宗盛に熊野と云へる愛妻あり。老母の病氣さて遊野は暇を顧へず中々ゆるるるるけしきしな。落花の和歌より主人の心にはほれり。心ならずも花見の供とする途。中々みる物事につけて無常と感ず母を氣づかす涙をせしむ。夢の問ととき 春は好き時節なれば夢の問も惜しきの意。

ワキ詞「是は平の宗盛なり。さても遠江の國池田の宿の長をば熊野と申し候ふ。久しく都にとめれきて候ふが。老母のいたはりどて度々いとまを乞ひ候へども。此春ばかりの花見の友とれもひ留めれきて候。いかに誰かある。トモ詞「御前候ふ。ワキ「熊野きたりてあらば此方へ申し候へ。トモ「畏つて候ふ。」

ツレ次第「夢の間をさき春なれや。咲く頃花を尋ねん。ナシ「是は遠江の國池田の宿。長者の御内仕申す。朝顔と申す女よて候ふ。詞「さても熊野ひさしく都へ御入り候ふが。此程老母の御いたはりどて。度々人を御のほせ候へども。更へ御下りもなく候ふほどよ。此度は朝顔が御むかへへのほり候ふ。道行「此程の旅の衣の日もそひて。いく夕ぐれの宿ならん。夢もかすそふか

草木は雨露のめぐみ。雨露の恩に依りて草木のそだつと云ふ。兼得自爲二花父母一期除染の時。春風の花と笑ひうたて其父母と爲ると云ふ。況んや人間に草木にても花にても母の恩は深きものやましてや人間は細更の意。何ぞかたん入り候らん。さまで熊野の心中と述ぶ。

みうするにて候ふ 見候ふべしに同じ。 困つた事なの意。 此ふみとも御目にかけて 貴人と用ひす。

り枕。あかしくらして程もなく。都へ早く着きよけり。詞「急ぎ候ふ程よ。是ははや都へ着きて候ふ。是なる御内が熊野の御入り候ふ所よてありげに候ふ。まづ案内を申さばやと思ひ候ふ。いかゝ案内申し候ふ。池田の宿より朝顔が参りて候ふそれく御申し候へ。

レテカシ「草木は雨露のめぐみ。養ひえては花の父母たり。況んや人間に於てをや。あら御心もどなや何とか御入り候ふらん。ツレ詞「池田の宿より朝顔がまわりて候ふ。シテ詞「なほ朝顔と申すかあらめづらうや。さて御いたはりは何と御入りあるぞ。ツレ「以ての外に御入り候ふ。是は御文の候ふ御らん候へ。シテ「あらうれしや先々御ふみをみうするよて候ふ。あら笑止る。此御ふみのやうも頼みずくなく見にて候ふ。ツレ「左様へ御入りて候ふ。シテ「此上は朝顔をもつれて参り。又此ふみをも御目にかけて。御暇

びんなう候へども 不都合なが
らゝの意。失禮ながらの意。
ろさ。ちよいと位の意。
げさん 御覽に伺へ。

甘泉殿 漢の武帝の寵姫李夫人
の住みたる宮。これより文の支
句。
心ゆくたく 甘泉殿の祭花の夢
めたる様に降ゆべきと云ふ。
山宮 唐の玄宗皇帝の寵姫楊
貴妃の住みたる宮。
寝なきにしもあらず 山宮を
眺み秋の月もつひに光を失ふべ
き時ありとなり。

末世一代教主の如來
と云ふ。末世に出で、現世如來
と教化する意。この釋迦如來で
す。凡夫のわんざに給へり。まは
てや凡夫のわんざに給へり。まは
年ふりまさる朽木櫻。老の身を
朽木の櫻に比す。今年の春だけ
の花も待たれはせし。多分其頃
も待たれはせし。此世だけの睡
親子は一世の中。此世だけの睡
老いぬれば去らぬ別れのありさ
へばいよく見まわしき君さ
古今集の歌。年されば死別とい
ふ事の子の顔の常に見て居た
さなり。よみたる時のわけは
下に云へり。
かきこむ。これにて文をば
朝にひまなき。朝廷の出仕にい
さまなきなり。

世の中にさらわかれのなくも
千代も新入の子のため
業平の母にわくり返歌。これ
も古今集。

を申さうずるにてあるぞなたへ來り候へ。誰か渡り候ふ。
モ詞「誰よて渡り候ふぞ。や。熊野の御まわりよて候ふ。シテ」わ
らはが参りたる由御申し候へ。トモ「心得申し候ふ。いかよ申し
上げ候ふ。ゆやの御参りよて候ふ。ウキ詞「こなたへ來れと申し
候へ。トモ「長つて候ふ。此方へ御参り候へ。シテ」いかに申し上
げ候ふ。老母のいたはり以ての外は候ふとて。此度は朝顔よふ
みをのぼせて候ふ。びんなう候へどもうと見参にいれ候ふべし。
ウキ「なよと故郷よりのふみと候ふや。見るまでもなよそれよて
たからかによみ候へ。」
シテ「甘泉殿の春の夜の夢。心をくだくはよととなり。驪山宮の秋
の夜の月。きはりなきよもあらば。末世一代教主の如來も。
生死の掬をば遁れ給はず。過ぎよ二月の頃申しよ如く。何と
やらん此春は。年ふりまさる朽木櫻。こどよばかりの花をたよ。

待ちもやせと心よわき。老の鶯あふ事も。涙にむせぶばかり
なり。たゞ然るべくはよきやうよ申し。あばの御いとまを賜
はりて。今一度まみねはよませ。さなきたよ親子は一世のな
かなるよ。れなよ世よだにそひ給はずは。孝行よもはづれ給ふ
べし。唯かへすぐも命の内よいまひと度。見まわらせたくて
そ候へとよ。老いぬれば去らぬ別れのありといへば。いよく
見まわしき君かなと。ふることも思ひ出の涙ながら書き
とむ。地「そも此歌と申すは。在原の業平の。其身は朝よひま
なきを。長岡よ住み給ふ。老母のよめる歌なり。さてこそ業平も。
さらぬ別れのなくもがな。千代もといのる子の爲と。よみ事
こそあはれなれ。シテ詞「今はかやうよ候へば。御暇を賜はり。
東に下り候ふべし。ウキ詞「老母のいたはりはさる事なれどもさ
りながら。この春ばかりの花見の友。いかでか見すて給ふべき。

世の中にさらわかれのなくも
千代も新入の子のため
業平の母にわくり返歌。これ
も古今集。

世の中にさらわかれのなくも
千代も新入の子のため
業平の母にわくり返歌。これ
も古今集。

に立つる木。 教へかちびく云ふ。 乞食に同す。 佛体色性 佛体にひさしきもの

心の花の 心のまだ衰へぬを花 なたさへて歌よまんといふ事 金剛薩埵 金剛部の諸尊の通

三摩耶形 本誓と稱す。

地水火風空 人体に具せる原 五体五輪 二肘二膝に頭を併せ 一見卒都婆永離三惡道 死者が 一念發起 善提心 うれもいかでかれとるべき。 ッレ「善提心あらばなど浮

婆よては無きか。 うこ立ちのきて餘の所に休み候へ。 シテ「佛体 色性のかたじけなきとは宜へども。 是ほどの文字も見えず。 刻 める像もなし。 たゞ朽木とて見えたれ。 ッキ「たどひ深山の朽 木なりとも。 花咲き木はかくれもなし。 いはんや佛体に刻め る木。 などかゝるのなかるべき。 シテ「我も賤き埋木なれど も。 心の花のまだ有れば。 手向になどかならざらん。 さて佛体 たるべき謂は如何に。 ッレ「うれ卒都婆は金剛薩埵。 かりに出化 して三摩耶形を行ひ給ふ。 シテ「行ひなせる形は如何よ。 ッキ「地 水火風空。 シテ「五体五輪は人の体。 何よ隔あるべきぞ。 ッレ 「像はうれれたがはずとも。 心功德はかはるべし。 シテ「さて都卒 婆の功德は如何よ。 ッキ「一見卒都婆永離三惡道。 シテ「一念發起 善提心。 うれもいかでかれとるべき。 ッレ「善提心あらばなど浮 世をど厭はぬぞ。 シテ「姿が世をも厭はさう。 心ころ厭へ。 ッキ

われも休むは 卒都婆も臥して 順縁に隨ひて佛縁と結ぶと 逆縁云ふ。 情に違ひて佛縁と結ぶと 提婆云ふ。 釋迦に抵抗して佛敵と爲 提婆たる人。 釋迦の弟子中大恩なりし 提婆人。 心の迷と云ふ。 善提本無し。 明鏡亦非。 是善提。 心は如三。 明鏡。 一と云ふ。 へる項ありしと反對に云へるなり。

非人 乞食の事。

極樂の内ならはこころ 歌の意は 極樂の内に行きて佛体に候は 外なれば苦しき知られぬ。 卒都婆の向とよせたり。

「心なき身なればこころ。 佛体をば知らざるらめ。 ッレ「佛体と知れ ばこころ卒都婆よは近づきたれ。 ッレ「さらばなど禮をば爲さて敷 きたるぞ。 シテ「とても臥したる此卒都婆。 我も休むは苦しいか。 ッキ「うれは順縁よはづれたり。 シテ「逆縁なりと浮ぶべし。 ッレ 「提婆が悪も。 シテ「觀音の慈悲。 ッキ「樂特が愚癡も。 シテ「文珠の 智慧。 ッレ「惡と云ふも。 シテ「善なり。 ッキ「煩惱といふも。 シテ「善 提なり。 ッレ「善提もど。 シテ「植木よあらす。 ッキ「明鏡また。 シ テ「臺よ無し。 地「げよ本來一物なき時は。 佛も衆生も隔なり。 も により愚癡の凡夫を。 救はん爲めの方便の。 深き誓ひの願なれ ば。 逆縁なりと浮ぶべし。 ねんごろよ申せば。 誠よ悟れる非 人なりとて。 僧は頭を地につけて。 三度禮し給へば。 シテ「われ は此時ちからを得。 なほ戯れの歌をよむ。 極樂の内ならはこころ 惡くからめ。 うとは何かは苦しかるべき。 地「むつかの僧の教

桂の眉墨 桂は月の異名。月の如き眉墨の意。鏡のすぐれたりしと云ふ。あやうすもの衣に桂の木にて作りしと云ふ。桂殿は桂の木にて作りし殿。漢の河の月が袖に静に落つるの意。霜の如く白く蓬の如く亂れたる髪と云ふ。おつけては髪を細くする意。つやくしは髪をたりし髪。眉と蛾と云ふ。虫の形に譬ふ。眉と蛾と云ふ。遠山の色。眉の作り方と遠山に譬ふ。百年に一年足らぬつくも髪(われ)は物語の歌。百の字の頭なる一と除けば白の字さめる。つくも髪は深草の名にて髪をちりたる如き草の頭なる。ちりたる白髪と云ふ事なり。

粟豆のがれいひ 粟や豆をまぜ干して作れる食物。がれいひは飯すくに 垢膩と書く。垢づき脂つあつたると云ふ。竹にて編める籠。

色が深うて 顔色の深くすくれたると云ふ。あきくれて まつ暗に爲つての意。五月雨の空 と云ふと空言にいひつく。

化や。

ワキ詞「さてれ事は如何なる人ぞ名をれん名のり候へ。シテ詞「はづかゝながら名を名のり候ふべし。これは出羽の郡司小野の良實がむすめ。小野の小町が爲れるはてよとさむらふなり。ワキツレ「いたはーやな小町は。さもいよーは遊女よて。花のかたちかゝやき。桂の眉墨青うて。白粉を施さず。羅綾の衣多うて。桂殿の間に餘りいづか。シテ「歌をよみ詩を作り。地「酔ひをすゝめる盃は。漢月袖に静なり。まこと優なる有様の。いつ其ほどにひきかへて。頭には霜蓬をいたくき。嬋妍たりー兩髪も。はたへにかむけて墨みだれ。艶々たりー雙蛾も。遠山の色を失ふ。百年に一年足らぬつくもがみ。斯かる思ひは有明の。影はづかゝき我身かな。シテ「けロソキ地「首に懸けたる袋には。如何なる物を入れたるぞ。シテ「け

ふも命は知らねども。あすの飢ゑを助けんと。粟豆のがれいひを。袋に入れて持ちたるよ。地「うーろに負へる袋には。シテ「くの垢づける衣あり。地「臂にかけたるあじかには。白黒の田鳥子あり。地「破れ簀。シテ「やぶれ笠。地「面ばかりも隠さねば。シテ「まゝて霜雪雨露。地「なみだをだにも抑ふべき。袂も袖もあらぼころ。今は路頭は物を乞ひ。乞ひ得ぬ時は悪心。また狂亂の心つきて。聲かそりけーからず。

シテ「のう物給へのう御僧のう。ワキ詞「何事ぞ。シテ詞「小町がもとへ通はうよのう。ワキ「れこころ小町よ。何とて現なき事をば申すぞ。シテ「はや小町といふ人は。あまりよ色が深うて。あなたの玉章こなたの文。かきくれて降る五月雨の。空言なりとも一度の返事もなうて。いま百年は爲るが報うて。あら人戀ーや。あら人あひーや。ワキ「人こひーいと。さてれ事は如何なる

リせぬ先に歸る舟人。冷泉爲相
春ならば。下の句はかへて有りたき
詞なり。今は春ゆれば吹きても
さけき朝風なればゆ配なしの
常盤の聲。冬になりても落葉せ
ぬ木を常盤木と云ふ。こゝは松
風の常に音するを兼れたり。常
盤は永久の意にも用ふ。こゝは松
の近く花ふり音樂きこゆ。天人
の近く花ふり音樂きこゆ。天人
色香たへにして。色香すぐれて
に同じ。

末世の奇特に。末の世のしるし
國の實さすべきなり。前には
家の實さすべきなり。前には
切に爲りて國の實さすべきなり
らせり。衣を惜しむ情ひれつな

下界。天上に對して此世界と云
ふ。とやあらんやせんやあらん。とや
五玉のつら。玉と云ふは玉の
時。五玉は五種の玉を指す。玉の
上には花冠に委むとあれば。玉の
天の原ふり見れば。玉の原ふり
後風土の歌。これより天人の
哀しめる感情を寫す。天人の
迦陵伽の音ひ傳ふ。鳥の名。美
うらにふくまでなつ。迦陵伽の
づと千鳥の音ひ傳ふ。迦陵伽の
うらにふくまでなつ。迦陵伽の
まは自由自在の地。昨日
れは天衣を取らば。地に身も一枚
はれて塵くものす。羽衣を一枚
人間の御遊のかたみの舞。人間
の御遊と助けん。とてわが魂し
月宮をめぐらす。月宮殿と云
す。月宮のまはしる。舞曲と云
い。舞は人間にあり。高向にて
人の目録すべからず。さすは天
雲衣。舞曲の名。舞曲に
風に和し。風につれての意。

ものどけき朝風の。松は常盤の聲ぞか。浪は音なき朝なざに。
釣人れほき小舟かな。ワキ詞「われ三保の松原よあがり。浦のけ
しきをながむる所に。虚空よ花ふり音楽きこえ。靈香四方に薫
ず。是たゞごとく思はぬ所に。これなる松ようつくしき衣か
れり。よりてみれば色香たへにして常の衣にあらず。いかさま
どりてかへり古き人にもみせ。家の寶となさばやと存じ候ふ。
ワキ詞「のうその衣はこなたのにて候ふ。何れにめされ候ふぞ。
ワキ詞「是はひろひたる衣にて候ふ程よ。とりて歸り候ふよ。シテ
「うれは天人の羽衣とて。たやすく人間よあたふべき物よあら
ず。本のごとくよれき給へ。ワキ「うも此衣の御ぬとは。さて
は天人よてまゝますかや。さもあらば末世の奇特よとめれき。
國のたからとなすべきなり。衣をかへす事あるまじ。シテ「かな
いやな羽衣かくては飛行のみちも絶え。天上にかへらんことも

叶ふまじ。さりどては返らひ給へ。ワキ「此御詞をきくよりも。
いよくはくれう力を得。本より此身は心なき。天の羽衣どり。
かく。かなふまじとて立ちのけば。シテ「今はさながら天人も。
はねなき鳥の如くにて。あがらんぞすれば衣なり。ワキ「地よま
た住めば下界なり。シテ「とやあらんかくやあらんぞかな。めど
ワキ「はくれう衣をかへさねば。シテ「力及ばず。ワキ「せんかたも
地「涙の露の玉鬘。かさゝの花もいさくと。天人の五衰も。目
のまへにみえてあさましや。
シテ「天の原ふりさけみれば霞たつ。雲路まどひてゆくへいらす
も。地「住み馴れし空にいづかゆく雲の。うらやまきけなきか
な。迦陵伽のなれく。聲今さらわづかなる。鴈金のかへ
りゆく。天路をきけばなつかしや。千鳥の沖つ浪。ゆくかか
へるか春風の。空に吹くまでなつかしや。

うきわざなき 漁夫の業も憂

うろくづ 隣にて魚に同下。 敵を勝して 魚と戯れりあつ

よし／＼同下わざながら 世にすべし 名所の湖に漁する身なればの

志賀の都 花園 眞野 うの逢 志賀の都は 千載葉に 昔なみや 志賀の都はあれにしと 語を取る。

醫の舟 佛の衆生を救はんとの 醫と舟とて 彼岸に渡すに譬ふ。

名こころ波や 名にこころ波の 文字あれど 海には波なしと云ふ

江に近き 近江の字を解制して 其江に近き山々をつげたり。 時しらぬ山は 花と雲に見なし 其雲の時節も知らず降りたり 山と云ふ。 都の富士と比擬 山と云ふ。

旅のならひの 旅の難なれば今 まで他人と見しも同船して細な れ／＼しく爲ると云ふ。

緑樹影沈上レ木。 清波月落見奔レ 風。 越長寺の厨自休の竹生島に 語でたる詩の句。 清波月落の句 とはへて用ひたり。

れも。ツレ「霞みわたれる朝ほらけ。シテ一聲「のどかに通ふ船の道。シテツレ「うきわざとなきこころかな。シテサシ「これは此浦里に住みなれて。明暮はこぶうろくづの。二人「數を盡して身ひとつき。助けやせんとわび人の。ひまも波間よ明けくれて。世をわたるころ物うけれ。歌「よ／＼／＼同じわざながら。世にこえたりな此海の。名所れほき數々に。浦山かけてながむれば。志賀の都花園。むか／＼ながらの山樓。眞野の入江のふなよほひ。いざさ／＼よせて事問はん。

ワキ詞「いかには是なる船に便船申さうのう。シテ詞「これは渡し船にてもなく。御覽候へ釣船にて候ふよ。ツキ「こなたも釣船と見て候へばこころ便船とは申せ。これは竹生島にはじめて参詣の者なり。誓の船に乗るべきなり。シテ「げよ此所は靈地にて。歩みを運び給ふ人を。とかく申さは御心にも違ひ。又は神慮もはか

りがたし。ツレ「さらばれ船を参らせん。シテ「うれ／＼やさてはむかひの船。法乗の力ちからとればえたり。シテ詞「けふは殊更のどかよて。心にかゝる風もなし。地「名こころさ／＼波や。志賀の浦にれ立ちあるは。都人みやびかいたは／＼や。れ船にめされて浦々をながめ給へや。地「處は海の上。國は近江の江にちかき。山々の春なれや。花はさながら白雪しろゆきのふるか残るか時／＼らぬ。山は都の富士なれや。なほさえかへる春の日に。比良の嶺かみれろ／＼吹くとても。沖こぐ船はよも盡きと。旅のならひの思はずも。雲井のよろに見一人も。同じ船に馴れ衣なまこ。浦をへたて／＼行くほどに。竹生島も見えたりや。シテ「緑樹きよじかけ沈んで。地「魚樹うまじよのぼるけ／＼きあり。月海上うみうへよ浮んでは兎も波を走るか。れも／＼の島のけ／＼きや。シテ詞「舟が着いて候ふ御上り候へ。ワキ詞「あらうれ／＼ややがて神前かみまへへ参り候ふべし。シテ「この尉じゆうが御道かみみち／＼申さうするよて

竹生島

九生如來 大日如來の事。

のうれまでも いや其例を引くまでも候はず。手近き例のありしもの意。

いふ悲願を 隔なく守らん。大慈悲の願と起し給ひてなり。正覺 悟を得るの意。獅子通王 獅子通王佛といふ佛の前世以前より辨財天は此誓を立て給へる事竹生島縁起にあり。利益に同下。

白波の 立ちへりの序。

候ふ。これこそ辨財天にて候へよく御祈念候へ。ッキ「承り及びたるよりもいやまさりて有りがたう候ふ。不思議やな此の島は。女人禁制どころ承りて候ふよ。あれなる女人は何とて参られて候ふぞ。シテ「うれは知らぬ人の申しごとよて候ふ。かたじけなくも此島は。九生如來の御再誕なれば。殊に女人こそまわるべけれ。ッレ「のうれまでもあきものを。地「辨財天は女体にて。うの神徳もあらたなる。天女と現じればあませば。女人とてへだてな。たゞ知らぬ人の言葉なり。ッキ「かゝる悲願をれこして。正覺年ひさし。獅子通王のいよへより。利生さらされこたらず。シテ「げよくかほ疑ひも。地「荒磯じまの松陰を。たよりによする海人小舟。われは人間にあらざとて。社壇の扉をねひらき。御殿に入らせ給ひければ。翁も水中に入るかと見へ白波の。立ち返りわれは此海の。あるじと云ひす

て。また波に入らせ給ひけり。

地「御殿いきり鳴動して。日月ひかりかきやきて。山の端いつる如くよて。あらはれ給ふぞかたじけなき。天女「うもくこれは。此島に住んで臣をうやまひ國をまもる。辨財天とはわが事なり。地「うの時虚空に音楽きこえ。花ふりくだる春の夜の。月にかくやく少女の袂。かへすぐもれもいろや。

地「夜遊の舞樂も時すきて。月すみわたる海づらに。波風いきり鳴動して。下界の龍神あらはれたり。龍神湖上出現して。

ひかりもかくやく金銀珠玉を。かのまれびとにさくぐるけき。ありがたかりけるきどくかな。シテ「もとより衆生濟度の誓ひ。地「もとより衆生濟度の誓ひ。様々なれば。或ひは天女の形を現じ。有縁の衆生の諸願を叶へ。又は下界の龍神となつて。國土を静め誓ひを現はし。天女は官中に入らせ給へば。龍神はすなはち

下界 此世界より下にある世界。すなはち龍宮の事。

衆生濟生 人間をひろく救ふ有縁の衆生 佛の信徒のたぐひ。すべて佛神に縁ある人々を云ふ。

湖水に飛行して。波を蹴立て水を返して。天地に群がる大蛇の形。天地に群がる大蛇の形は。龍宮に飛んで入りける。

景清

かげきよ

元清作

ヒメトモ次第「きえぬ便も風なれば。露の身いかになりぬらん。ヒメ
「是は鎌倉龜が江が谷よ。人丸と申す女よて候ふ。さても我父惡
七兵衛景清は。平家の味方たるよより。源氏よ憎まれ。日向の
國宮崎とかやに流されて。年月を送り給ふなる。いまだならば
ぬ道すがら。物うき事も旅のならひ。また父ゆゑと心づよく。
ヒメトモ「思ひねの涙かたしく。草の枕つゆをうへて。いとげき
たもとかな。歌「相模の國を立ちいでよ。誰よゆくへを遠江。げ
よ遠き江よ旅舟の。三河よわたす八橋の。雲井の都いつかさて。
かりねの夢よなれて見ん。ヒメトモ「やうく御急を候ふほどよ。

是ははや日向の國宮崎とかやよ御着きよて候ふ。こゝよて父御
の御行方を御尋ねあらうするよて候ふ。

シテ「松門ひとりどちて年月を送り。みづから清光を見されば。

時のうつるをもわきまへず。暗々たる庵室よ徒よ眠り。衣寒暖

よあたへされば。はたへは體骨と衰へたり。地よとても世をうむ

くとならば墨よこす。染むべき袖のあさましや。やつればはてた

る有様を。我だよ憂よと思ふ身を。誰ころありて憐みの。憂き

まどむらふよもなし。

ヒメ「ふよさやな是なる草の庵ふりて。誰すむべくも見えざるよ。

聲めづらかし聞ゆるは。もよ乞食のありかよと。軒端も遠くみ

えたるぞや。シテ詞「秋きぬと目よはさやがよ見えぬども。風の

音信いづちども。ヒメ「あらぬ迷ひのはかなさを。あはよやすら

ふ宿もなし。シテ詞「げよ三界は所なりた。一空のみ。誰とかさ

松門「松の木にて自ら門を成せ
るよと云ふ。
衣寒暖に
ふるよの
なれば衣は
一枚な
るの意。
骨はかりの
機に渡したる
まよと云ふ。
世を背かば法師に
わやつれの
様よと云ふ。
世を背かば法師に
わやつれの
様よと云ふ。

軒端も遠く
見ゆるは
もよ乞食の
ありかよと
軒端も遠く
みえたるぞ
や。シテ詞
「秋きぬと
目よはさや
がよ見えぬ
ども。風の
音信いづち
ども。ヒメ
「あらぬ迷
ひのはかな
さを。あは
よやすらふ
宿もなし。
シテ詞「げ
よ三界は所
なりた。一
空のみ。誰
とかさ

われも平家なり われも平家なれば其平家物語せんとの意

我名もあらはるべし 女もあらはるべし 女もあらはるべし 女もあらはるべし 女もあらはるべし

シテ詞「いかし申し候ふ。たゞいまはちと心にかゝる事の候ひて。短慮を申して候ふ御免あらうするよて候ふ。ウキ詞「いやくいつもの事よて候ふほどよ苦くからず候ふ。又われらより以前よ。景清を尋ね申したる人はかく候ふか。シテ「いやく御尋ねより外よ尋ねたる人はなく候ふ。ウキ「あら偽を仰せ候ふや。まさう景清の御息女と仰せられ候ひて御尋ね候ひし物を。何とて御つとみ候ふぞ。あまりよ御痛はしきよ。是まで御供申して候ふ。急いで父御よ御對面候へ。ヒメ「のう自こころ是まで参りて候へ。恨めしやはるるの道すがら。雨風露霜をのぎて参りたる心さしも。いたづらなる恨めしや。さては親の御慈悲も。子よよりけるかや情なや。シテ「今まではつとみかくすとれもひしよ。あらはれけるか露の身の。置きどころなや恥かしや。御身は花の姿よて。親子と名のり給ふならば。殊よ我名もあらはるべし

疎き人をも訪へかして 疎き人をも訪へかして 疎き人をも訪へかして 疎き人をも訪へかして 疎き人をも訪へかして

名を取掲 中にて武略の名を取掲 名を取掲 中にて武略の名を取掲 名を取掲 中にて武略の名を取掲

ど。思ひきりつくすすなり。我を恨みと思ふなよ。地「あはれげよいよーへは。疎き人をも訪へかして。恨みうする其むくいよ。正しき子よたよも。訪はれしと思ふ悲しきよ。一門の船の内よ。肩をならべ膝を組みて。所せくすむ月の。景清は誰よりも。御座船よなくてかなふまじ。一類の以下武略さまままよ多けれど。名を取掲の船よのせ。主従「だてなかりしは。さも羨まれたりし身の。麒麟も老いぬれば。驚馬よ劣るが如くなり。ウキ詞「あらいたはしやまづかうわたり候へ。いかし景清よ申し候ふ。御娘御の御所望の候ふ。シテ詞「何事よて候ふぞ。ウキ「八島よて景清の御高名の様かきこめられたきよー仰せられ候ふ。そと御物語あつてきかせ申され候へ。シテ「是は何とやらん似合はぬ所望よて候へども。是まではるる来りたる心さし。

利なかつし事 利無かりし事に
同し。 甚しきに同し。 甚だ
いみじき 用ふ。 用ふ。 用ふ。

物々しや 大らうらしやの意。
ひらめいて 刀の意。 ひらめいて
はむいたる 刃向いたるの意。
うむいたる 刃向いたるの意。

さしうしや さしうしやと引きて
云ふ。 見ゆるしやの意。

三保谷 八景あり。

かぶさのしころ 兜のうしろに
附きたるもの。

なき跡と わが死したらんあと
とたり。 吊ひ給はるるの
経文の功德 暗中の燈火。 あし
き道の橋も頼み方にして成佛
すべしとたり。

あまり不便候ふほどよ。 語つてきかせ候ふべし。 此物語す
候は。 かの者をやがて古郷へ歸して賜はり候へ。 「心得
申候ふ。 御物語す候は。 やがて歸し申さうするよて候ふ。
シテ」いで其頃は壽永三年三月下旬の事なり。 平家は船源氏
は陸。 兩陣を海岸に張つて。 九がひは勝負を決せんと欲す。 能
登守教經のたまふやう。 去年播磨の室山。 備中の水島鶴越に至
るまで。 一度も味方の利なかつし事。 ひとへは義經が計いみじ
きよよつてなり。 いかよもして九郎を討たん謀ころあらまほし
けれと宣へば。 景清心と思ふやう。 判官なればとて鬼神よても
あらばころ。 命をすてば安かりなれと思ひ。 教經は最期の暇乞
ひ。 陸にあがれば源氏の兵。 あますまじとてかけむかふ。 地「か
げきよ是を見て。 物々しやと夕日影。 打物ひらめかいて。 き
つてかゝればころへずして。 はむいたる兵は。 四方へばつとぞ

にげよけるのがさごと。 地「さしうしやや方々よ。 地「さしうしや
かたよ。 源平たがひよ見る目も恥づかし。 一人をどめん事は
案の打物。 小脇よかいこんで。 なよがしは平家の侍悪七兵衛景
清と。 名のりかけなのりかけ。 手取にせんとて追うて行く。 三保
の谷が着たりける。 胃のころを。 取りはづとりはづ。 二
三度逃げのひたれども。 思ふ敵なればのがさごと。 飛びかゝり
胃をれつとり。 えいやと引くほどよ。 ころはきれて此方よと
まれば。 主はさきへ逃げのひぬ。 遙へたてへ立ち歸り。 さる
よても汝れろろ。 腕のつよきといひければ。 景清は三保の
谷が。 頸の骨ころつよければ。 笑ひて左右へのきよける。
地「むかへ忘れぬ物がたり。 れどろへはてへ心さへ。 みだれけるが
や恥づか。 や。 此世はとていよくほどの。 命のつらさ末近。 は
や立ち歸りなき跡を。 吊ひ給へ盲目の。 くらき所の燈。 あしき

さらばよ 父の詞。
ゆきふ 父の詞。
たけぞ 父の詞。
これに 父の詞。
結びたり。

吉田の少將の契りし女。形見の狂
女となりたる。思ひわぶる。狂
女と申す。物語の種なり。ついに
上。扇として物語の種なり。ついに
等。女に云ふ。扇の中。下。扇の中
た。女に云ふ。扇の中。下。扇の中

うきふし。けき河竹の。河竹は
竹の名にて。水邊に生ふるもの
なれば。流れて。水邊に生ふるもの
たるが。ついに。遊女の。名を。爲れ
ふに。同じ。竹の。縁にて。節の。字と
流る。遊女は。流れて。従ひて
世と。流る。如きもの。なれば。云ふ。

道橋と頼むべし。さらばよとまる行くがとの。只一聲をきよの
こす。これぞ親子のかたみなる。

班女

元清作

狂言詞「かやうは候ふ者は美濃の國野上の宿の長よて候ふ。さて
も我花子と申す上藤をもち参らせて候ふが。過ぎよ春の頃都
より。吉田の少將とやらん申す人の。東へ御下り候ふが。此宿
は御とまり候ひて。かの花子と深き御契の候ひけるが。扇をど
りかへて御下り候ひより。花子扇は詠め入り。聞より外よ
づる事なく候ふほどよ。かの人を呼びいだし追ひいださばやと
思ひ候ふ。いかは花子。けふよりしてこれよはかなひ候ふまじ。
とくく何方へも御いで候へ。シテ「げよやもとよりも。定めな
き世といひながら。うきふしをけき河竹の。流れの身こす悲し

われ衣。裳の意に用ひて野上
の序とす。衣の幅とひこのよた
ればなり。立ちも近江も縁を
別れしよりの。涙を露に響へて。
其露もすくに消れたき意と述
ぶ。

都と白河の關。後拾遺集の
歌。

旅衣。浦山の序なり。衣の裏の
意。立ちも歸るもろの縁際。

けれ。地「わけ迷ふゆくへもいらでぬれ衣。野上の里を立ちいで
て。近江路なれどうき人よ。別れよりの袖の露。うのまく消
えぬ身がづらき。

ワキ次第「歸るが名残富士の嶺の。ゆきて都よかたらん。詞「是は

吉田の少將とはわが事なり。さてもわれ過ぎよ春の頃東よ下

り。はや秋よもなり候へば。只今みやこよ上り候ふ。道行「都を

ば。霞とともよ立ちいでよ。一ばよほどふる秋風の。れと白河

の關路より。また立ち歸る旅衣。浦山すきて美濃の國。野上のさ

とよ着きけけり。詞「いかに誰かある。いうぐ間これははや美濃の

國野上の宿よて候ふ。此所は花子といひ女よ契り事あり。
いまだ此ところよあるか尋ねて來り候へ。トモ詞「畏つて候ふ。
花子の事を尋ね申して候へば。長と不和なる事の候ひて。今は
此ところよは御入りなきよ申候ふ。ワキ詞「さては定めなき

糺 下賀茂云云。

春日野の雪間をわけて生ひ出でく
草のはつかに見ゆし君かも
古今集の歌。草のまてははつかに
の序なり。はつかにほのかに
なれ衣。身に若馴れたる衣。重
夕暮は雲の旗手に物ぞ思ふ。天津
空なる人と思ふ。古
集の歌。雲の旗ては旗のやう
に御引く。雲と云ふ。其如く亂れ
ての意。
うはつ空に。心の虚空にうか
と離れてものさまよふ意。住所
上再拜。神拜の詞。
戀入してふわが名はまだき立ちにけ
り。初めしに早くも名は立ちけるよ思ひ

事ながら。もゝ其花子歸りきたりたる事あらば。都へついでの時
時は申へ上せ候へどかたく申へつけ候へ。急ぐ間ほどなく都へ
着きて候ふ。われ宿願の子細あれば。是よりすぐ糺へ参らう
ずるにて候ふ。皆々まわり候へ。
後シテ一聲「春日野の雪間をわけて生ひいでくる。草のはつかよ見
えー君かも」詞「よゝなき人よなれ衣の。日を重ね月はゆけども。
世を秋風のたよりならでは。ゆかりををらする人もなし。夕暮
の雲の旗手よ物を思ひ。うはの空まあくがれいでよ。身をいた
づらよなす事を。神や佛も憐みて。思ふことをかなへ給へ。うれ
足柄箱根玉津島。貴船や三輪の明神は。夫婦男女のかたらしを。
まもらんと誓ひればします。この神々よ祈請せば。などかある
のなかるべき。謹上再拜。戀ひすてふ我名はまだき立ちよけ
り。地「人へれずこゝ思ひうめーか。シテ「あら恨めーの人心や。

げにや祈りつゝ。古今集に「い
ぎ神はうけつゝなりけりし
は戀せとと誓ひつゝ御歌して神
に見たりたるに神は受け給はぬと
の意。

心だに誠の道に叶ひなば祈らす
ても神や守らん。菅公の詠
真如の月。心の迷と去りて自性
の曇なきに譬へて真如の月と云
ふ。
衣の玉。法華經の信者其教を忘
れたる。或人親友の家につき
て酒飲み酔ひ伏したるに譬し
此時親友は寶珠と衣の裏に譬し
ておきたるに譬へて酔つて知ら
ざりしと云へり。珠は法華經に
當る。こゝに本心は有りながら
猶迷ふ心に譬へて。戀人とな
り。同世に歸し給へと祈るぞと
うたてやなぬ言となごの意。たも
しろのらぬ言となごの意。

サシ「げよや祈りつゝ。御手洗川よ戀せじと。たれかいひけん虚言
や。されば人心。まことすくなき濁江の。すまで頼まば神とて
も。うけ給はぬはことわりや。とよもかくよも人へれぬ。思ひ
の露の。地「れきどころいづくならまー身の行方。心だ誠の道
よかなひなば。いのらずとも神や守らんわれらまで。真如の
月はくもらむを。知らでほどへー人心。衣の玉はありながら。
恨みありやともすれば。猶れなと世と祈るあり。
トモ詞「いかよ狂女。なよとてけふは狂はぬが面白うくるい候へ。
シテ詞「うたてやなぬ御覽せよ今までは。ゆるがぬ梢と見えつ
れども。風のさうへば一葉もちるなり。たま〜心すくなるを。
狂へと仰せある人々ころ。風狂じたる秋の葉の。心もとも乱
れ戀ひの。あら悲〜や狂へとな仰せありさむらひうよ。トモ「さて
例の班女の扇は候ふ。シテ「うつつなや我名を班女と呼び給ふぞ

いかに申し候ふ 是より母に述ぶる詞。

耶等 案來の事。

母詞「如何に誰かある。狂言詞「御前に候ふ。母「時宗が事を申さば。祐成ともに勘當と申し候へ。狂言「畏つて候ふ。いかに申し候ふ。時宗の御事を御申しあらば。祐成ともに御勘當とれほせいでされて候ふ。シテ詞「まづ畏つたると申し候へ。某存ずる子細の候ふあひだ。此たひは同心にて申さうするにて候ふ。時宗詞「いや〜某はまわり候ふまじ。シテ「唯御参り候へ。いかに申し候ふ。われらが親のかたきの事。世に隠れなく候ふどころに。餘りに便なく候ふあひだ。時宗がことを申し直し。つれて御狩りに出づべき所に。時宗が事を申さば。祐成共に御勘當と候ふや。よく〜是を案じ見るに。シ「總じて祐成をも誠は思ひ給はぬや。地「たどひ時宗出家のいとまを申すとも。兄祐成に耶等もな〜。いかも身に思ひあり。これららさ〜見捨つるかど。かへつて御〜かり候ひてころ。慈悲の母とも申すべけれ。シテサ「うれ

河津の子ども 父は河津三郎と名のれり。 弘法 佛法を弘むると云ふ。

同宿 同宿の僧。 浦島 浦島の衣なるを萬の條にて宮より持ち歸りし話あるによりて箱根とつゞけたり。 中々 俗には。俗は僧ならぬ人云ふ。却りて僧にならざりし方がましなり。

現世安穩後生善所 此世にては安穩に。後生にては極樂にの意。 廻向 手向くる事。

かりくら 狩場と云ふ。

に時宗を法師ならぬとの御勘當。たどひ仰せよ〜たがひ。出家仕り候ふとも。地「われらが事は世よかくれな〜。あれ見よ河津が子供ころ。敵をのがれんとの出家。正しく弘法のためならず。同宿もれもひ賤〜まば。心も染まぬ墨衣の。浦島が子の箱根寺にて。明暮くや〜と思ふならば。中々俗よは劣るべ〜。シ「時宗は。箱根よ有り〜ある〜。法華經一部よみればえ。常は讀誦〜母上の。現世安穩後生善所と祈念する。又は毎日。六萬返の念佛。父河津殿に廻向する。かほど〜他念なき身を。此三年不孝蒙る。恩顔を拜せねば。御戀〜さもひとつ。又は狩場への門出。御暇戀〜さ。一方ならぬ望みなり。大かた治まる御代なれども。狩場や漁よ。不慮のあらうひある物を。シテ「其う〜我らは。狩場にれて例あ〜。地「昔を思ひ伊豆のれくの。赤澤山のかりくらよ。父も失せさせ給はずや。今とても。狩

春風桃李花開夜 白氏文集の
見渡せば柳櫻をこきませて(都ぞ
春のしきなりける) 古今集
花車 花やなる車。
八重一重みはて 三重と見はに
ひとせし。伊勢物語に「右近
の馬場のひとせし日むひに立
たりける車に女の顔の下座よ
文ありのひとせし日むひに立
りける車に女の顔の下座よ
騎射の御覧あるべき式内宮友の
は右近の馬場に代りに行はれ
る。其六日右近の馬場に代りに
云ふなり。さればひとせし日む
りてひとせし日むひに立たり
て此文は右近の馬場のひとせし

ん松かげの。ゆくへもみゆる梢より。北野の森もちかづくや。
右近の馬場に着きよけり。詞「急ぎ候ふ程に。是ハはや右近の馬
場に着きて候ふ。あれをみれば花見の人々とみえて。車をなら
べ興をつけ。まことよれもころう候ふ。いはらくやすらひ花
をながめばやと存じ候ふ。
シテサシ「春風桃李花のひらくるとき。人の心も花やかに。あくが
れいづる都の空。げよのどかなるときとかや。シテツレ一聲「見渡
せば。柳櫻をこきませて。錦をかざる花ぐるま。シテ「くる春で
どよさうはる。二人「心もながき氣色かな。地「花見車の八重一
重。みえて櫻の色や。ひをりせし。右近の馬場の木のまより。
かげも匂ふや朝日寺の。春のひかりもあまみてる。神の御幸の
あとふりて。松も木高き梅がえの。立枝もみえてくれなぬの。
はつ花車めぐる日の。ながえや北よつらくらん。

朝日寺 北野にあり。天宮宮の
筑紫より北野の神に神靈とつ
し給ふと云ふ。初花を花車
に花見の意をなすにつけて
野の花見の意をなすにつけて
あまた立ち出づる長き木。は
車の前に出づる長き木。は
遠見の家へ花便入。白氏文集の
時。はるかに花を花車へあ
はみずもあちや見も人の意
はあやなく見も人の意
むかひに立てる女車のひと
くはひに立てる女車のひと
たでもなき人。こんなにも
は何の故ならん。うのため
日はながめくらす。うのため
れはん思ひの。何かあやなく
案内して選ふべし。思ひの

ワキ「のどかなる頃はやよひの花見とて。右近の馬場の並木の櫻
の。陰ふむみちにやすらへば。シテ「げよやはるか人家をみて。
花あれば即いるなれば。木陰一車を立てよせけり。ワキ詞「むか
ひをみれば女車の。所からなる昔語り。思ひがいつる右近の馬
場の。ひをりの日はあらねども。みずもあらず。みもせぬ人
のこひくは。あやなく今日やながめくらさん。是れ業平の此
所にて。女車をよみ歌。今更れもひいでられたり。シテ「あら
れもころのくちらずさみや。右近の馬場のひをりの日。むかひよ
たてる女車の。所からなる昔語り。はづかしながら今はまた。
我身の上業平の。何かあやなくわきていはん。れもひのみこ
うあるべなりしを。ワキ「左様よあがめしことのはの。其舊跡も
こよなれば。今またかやう事問ふ人も。いつなれもせぬ人な
れども。シテ「た々花ゆるよ北野の森にて。ワキ「言葉をかはせば。

右近

右近

九十三

古文奇賞

花下宿 歸因 美景 白氏文集
 花心の時。ものにつれて移り鳥心
 百千鳥。春鳴くすべての鳥と云
 ふ。
 もとちどり花になれゆくあだし身
 ははかなきほごにうらやまれぬ
 古今和歌六帖の歌。百千鳥の花
 に馴る身はつひに落花の時に
 達ふ熱ありてはかなきものなれ
 うはの空に心よの意。
 うはの空に心の浮かる

櫻の宮 北野社内にあり。

こぞめ 流染は色の深きと云
 紅梅殿や老松 共に社内に祭り
 たる神。これも社内の祭神。
 一夜松とす 紫野の枕詞。
 あつれとす 紫野の枕詞。
 守は見すや 野の松振る 萬葉集

の歌。紫野やよみ野と袖うち振
 りつゝ君のゆく野守は見すや
 の意。
 ふるき御幸 醍醐天皇しばく
 北野に御幸ありし事見ゆ。
 御奥岡 北野にあり。

御本地 神の本体は佛なりと云
 ふ説はなはれし故に此語あ
 り。
 末社 本社に對して附屬せる社
 と云ふ。

あさまには何と 遠はかに何
 としてか言はん 岩代に於て
 待つ序さす 岩代は紀伊にて
 松とよめる古歌あり 天の枕詞。
 ひさかたの

シテ「みずもあらず。地「みもせぬ人や花の友。しるもいらぬも花
 の陰。相宿りしてもろ人の。いついかなれて花車の。榻立て
 て木のもと。下りおていさやながめん。げや花のもと。か
 へらん事をわするは。美景よりて花心。馴れくうめて
 ながめん。いさく馴れてながめん。百千鳥。花よなれゆくあ
 だし身は。はかなき程うらやまれて。うはの空の心なれや。
 うはの空のこころなれ。
 ロンギ地「げに名よれふ神がきや。北野の春もとさめける。神の
 名所かずくよ。シテ「ながむれば。都の空のはるくと。霞み
 わたるや北野官居。御覽せよ時をえて。花櫻葉の官所。地「花の
 こぞめの色わけて。紅梅殿や老松の。シテ「緑よりあけうめて。
 ひとよ松もみえたり。地「日影の空もあかねさす。シテ「むらさき
 のゆきーめのゆき。地「のもりは。みずや君が袖。ふるき御幸の

ものみとて。車も立つや御興岡。是ぞ此神の御旅居の。右近の
 馬場わたり。神幸がたつとかりける。

ワキ詞「あらありがたの御事や。かくも委しくかたり給ふ。社
 社の御本地を。なほくをーははませ。テ詞「まことは我
 の此神の末社とあらはれ君が代を。守りの神と思ふべー。ワキ

「よくくきけばありがたや。守りの神とは扱やいづれの靈神よ
 て。かやうよあらはれ給ふらん。シテ「あらはづかや神ぞとは。
 あさまはなよといはしるの。地「待つことありや有明の。月も

くもらぬひさかたの。天照神にては。櫻の宮と顯はれ。こよよ
 北野のさくらばの。神とゆふへの空晴れて。月の夜神樂をもち
 給へど。はなよかくれうせにけりや。花よかくれ失せよけり。
 ワキ歌「げよ今とても神の代の。ちかひは盡きぬーるとて。神
 ど君どの御恵み。まことなりけりありがたや。

さて其枕は 此前に。不思議の
枕と持たれば一睡さよす
むる狂言の詞あり。此詞終りて。
あれなる大床に御座候ふと教ふ
さば立ち越え。このあまに狂
言は。粟の飯を炊く間しづかに
眠り給へとの意を述ふ。身の未
來を知るべき始めなれば。先づ
一枕に就き夢の告と試みん。立
寄る意。雨や雪り。は雨と立
中宿。羊飛山まで行く間の宿。

候ふ。一夜の宿を御か候へ。狂言「シカク」。シテ「是は蜀の國
のかたはらよ。盧生といへる者なり。われ人間ありなから佛
道をもねがはず。たゞ茫然とあかしくらすところに。楚國のや
うひさんよ。たつとき知識のまゝす由承り及び候ふ程に。
身の一大事をもちねばやと思ひたちて候ふ。狂言「シカク」。
シテ「さて其まぐらはいづくに御座候ふぞ。狂言「シカク」。シテ「さて
らば立ち越え一睡見うするまで候ふ。狂言「シカク」。シテ「さて
はこれなるが聞き及びよ。邯鄲の枕なるかや。是は身をこる門
出の。世のこゝろみ夢のつけ。天のあたふる事なるべし。歌
「一村雨のあまやどり。口はまだ残る中宿よ。かりねの夢を見る
やと。邯鄲の枕にふよけり。
ソキ詞「如何に盧生申すべき事の候ふ。シテ詞「うもいかなる者
ぞ。ソキ「楚國の帝の御位を。盧生よゆづり申さんとの。勅使是

代と持ち給ふべき。天子を爲り
て代と有つと云ふ。天子を爲り
すのさう。めでたき入相。

夕露の玉と云ふ意に續けたり。

法の道 佛法にては榮花も一時
の夢と云ふ。佛にうれども知らずの
意に用ふ。たゞし乘の文字に云
ひかけたるが主なり。

雲龍閣 阿房殿 共に唐土の天
子の御殿の名。

玉の戸 玉にて作れる門の戸。

寂光の都 佛の住み給ふ都。
喜見城 天上の宮城。
千貨萬貨 種々の寶。
千戸萬戸 千家萬家に同じ。
はたのあし 旗の長く垂れ下りた
る所のあし。旗の長く垂れ下りた
しく天に打掛くの意。

まで参りたり。シテ「思ひよらずや王位よは。うも何ゆゑような
はるべき。ソキ「是非をばいかではかるべき。御身代をもち給ふ
べき。其瑞相こゝろまゝすらめ。はやく興よめざるべし。シテ
「こはうも何と夕露の。光りかくやく玉のこし。乗りもならはぬ
身のゆくへ。ソキ「かくるべきとは思はずして。シテ「天よもあが
る。ソキ「こゝろちいて。地「玉の御輿に法ののみち。榮花の花も一時
の。夢とはしら雲の。上人となるぞふしなる。有りがたの氣色
やな。もとより高き雲の上。月も光はあきらけき。雲龍閣や阿
房殿。光もみちくして。げよも妙なる有様の。庭よは金銀の砂
を敷き。四方の門邊の玉の戸を。出で入る人までも。光を飾る
よろほひは。誠や名よきよ。寂光の都喜見城の。たのしみも
かくやと。思ふばかりの氣色かな。千貨萬貨の御寶の。數をつら
ねてさしげ物。千戸萬戸のはたのあし。天よ色めき地よひやく。

さばかり多かりし。今まではあ
れほど多く居たるの意。
女御更衣 天子の侍女。我國中
古の定めは皇后中宮ありて大に
女御次に更衣とありし事。源氏
物語など見て心得べし。源氏
松風の音となり。云ふに云はれ
た。邯鄲の假の宿。人間萬事
くの如き。讀んで此處に至り
名文の味を知らざるは。それぞ
一炊の間に一睡と含めて云ふ。
同の意に一睡と含めて云ふ。

南無三寶 佛とあらはす同。
知識は此枕なり。此出處を求む
る道に教へ導く知識は羊飛山に
訪ふにも及ばず。此枕なりしと初
めに應じて結ぶ。

三位中将 實衛門は生田の藤の副將平
藤永三年鎌倉に下り。狩野介宗
と作れり。千手との掛合の内
きりなき位。太政大臣の事。清盛と
相國。

手越の長が娘 手越の宿は駿河
の國。長は遊女と池へ置く主人。

「紅葉も色こく。地」夏かと思へば。シテ「雪もふりて。地」四季を
りくは目のまへよて。春夏秋冬萬木千草も。一日は花さけり。
れもいろやふいさやな。かくて時過ぎ頃されば。五十年の榮花
もつきて。誠は夢の中なれば。皆きえくくと失せ果てよ。有り
つる邯鄲の枕の上よ。眠の夢はさめよけり。

シテ「盧生は夢さめて。地」盧生は夢さめて。五十の春秋の。榮花
もたちまちよ。たゞ茫然とれきあがりて。シテ「さばかり多かり
。地」女御更衣の聲とさきよは。シテ「松風の音となり。地」官殿樓閣
は。シテ「たゞ邯鄲のかりのやど。地」榮花のほどは。シテ「五十年
地」さて夢の間は粟飯の。シテ「一炊の間なり。地」ふいさなりやは
かりがたしや。シテ「つらく人間の有様を案するよ。地」百年の
歡樂も。命終れば夢ぞか。五十年の榮花こそ。身の爲よは是
までなり。榮花の望もよはひの長さも。五十年の歡樂も。王位

よなればこれまでなり。げよ何事も一すかの夢。シテ「南無三寶
南無三寶。地」よく思へば出離を求むる。知識はよの枕なり。
げよ有り難や邯鄲の。夢の世ぞと悟り得て。望かなへて歸り
けり。

千手 せんじゆ 古名 千手重衡 氏信作

ワキ詞「これは鎌倉どのの御内よ。狩野助宗茂よて候ふ。さても
相國のれん子重衡の卿は。此たび一谷の合戦にいけどられ給ひ
候ふを。某あづかり申して候ふ。朝敵のれん事とは申しながら。
頼朝いたはしく思召され。よく痛はり申せとの御事よて。昨
日も千手の前をつかはされて候ふ。かの千手の前と申すは。手
越の長が娘よて候ふが。優よやさしく候ふとて。れん身ちかく
召しつかはれ候ふを遣はされ候ふ事。まことよ有りがたきれん

先年遊行の
上人なれば
先年さば
先代の
上人の
來りし時
と云ふ。下
に先の
遊行さ
相模の
遊行寺
より奥州
へ
下る事。

其上朽木の
遊行の通り
給ひしのみ
ならす朽
木の柳も
ある街道
なればの
意。

老いたる馬には
實の管仲の
馬を用ひて
踏み迷ひたる
道を得
し古事。

むぐらよもぎふ
草の茂り生
ひたる地
の秋の霜
すれぬ夢
と吹く風
の秋の霜
今集の歌
淺茅生は
かやの生
ひ

たる處の
秋の霜の
如く盛なり
し日の標
は真になく
衰へはてたる
にの
意。
露分衣
露の字より
露と呼び。
露分衣者
て云ふと
來てに掛
く。露分衣
は文字の如
し。衣の
名に非ず。
枝さびて
影ふむ道は
柳の影と
ふむ道は
行末も見
ぬす。草
花々々し
て風
しこなり
り。

星霜 年月に同す。

北面 院の武士と云ふ。

水無月 六月の古名。
六時不斷 初夜。中夜。後夜。
辰朝。日中。日没。六時と云ふ。
ろれとたゆまず行ひて佛に仕ふ
る。不斷の勤と云ふ。
此集とば 古の歌集とす。新
に入りに傳はるほごの名歌とよ
まれしことなり。
新古今 後鳥羽院の院宣にて定
家。家。庭。などの撰ひたる歌集。は
道のへに清水なるく柳つげしは

シテ詞「のうく遊行上人の御供の人よ申すべき事の候ふ。ワキ詞
「遊行の聖とは札の御所望まで候ふか。老足なりともいま少急
ぎたまへ。シテ」有り難や御札をも賜はり候ふべし。まづ先年遊行
の御下向の時も。古道とて昔の街道を御通り候ひなり。され
ば昔の道を教へ申さんとて。はるく是までまわりたり。ワキ「ふ
いさやさては先の遊行も。此道ならぬ古道を。とほり一事のあ
りよのう。シテ」昔は此道なくして。あれよ見えたる一村の。
森のこなたの河岸を。御通りあり一街道なり。其上朽木の柳と
て名木あり。かくる尊き上人の。御法の聲は草木までも。成佛
の縁ある結縁たり。地「こなたへ入らせたまへとて。老いたる馬
よはあらねども。道あるべ申すなり。いうがせ給へ旅人。げよ
さぐな處から。人跡たえて荒れはつる。葎蓬生かるかやも。み
だれあひたる淺茅生や。袖よ朽ちよ一秋の霜。露わけ衣來て

みれば。昔を残す古塚よ。朽木の柳枝さびて。影踏む道はすゑ
もなく。風のみ渡るけいさかな。
シテ詞「是こころ昔の街道まで候へ。又是なる古塚の上なるこころ朽
木の柳まで候ふよく御覽候へ。ワキ詞「さては此塚の上なる
が名木の柳まで候ひけるや。げよ川岸も水たえて。河うひ柳
くちのこる。老木はうれとも見にわかず。葛葛のみはひかくり。
青苔梢を埋む有様。誠よ星霜年舊りたり。さていつの世よりの
名木やらん。くはしく語り給ふべし。シテ「昔の人の申しれき
は。鳥羽の院の北面。佐藤兵衛憲清出家。西行ときこえ一歌
人。此國よ下り給ひしが。水無月なかばなるよ。此河岸の木の
もとよ。あはし立ちより給ひつと。一首を詠じ給ひなり。ワキ
「謂さきければれも一ろや。さてく西行上人の。詠歌はいづれの
言の葉やらん。シテ「六時不斷の御勤めの。ひまなき内よも此集

異香 羅紗の香。

章提希夫人 室の明神の佛体。

上求菩提の 東北に云へり。
下化衆生の 五濁の水は實相無
相好無漏の大海に江口に註す。

前漢の張良が上の人より兵法
と授けられたる一巻の物語と作れり。
公程の意は公孫に眠なきて云ふ。

参らせられ候へ。ッレ詞「さらば御神樂を参らせうするにて候ふ。
こゝとても室山かげの神垣の。地「加茂の官居はありがたや。
」月影の。地「つきかげの。更けゆくまゝに風をさまれば。不
思議や異香薫じつく。和光の垂迹。章提希夫人の。姿をあらは
しはします。地「玉のかんざし羅綾のたもと。風にたなびく瑞
雲に乗じ。所は室の海なれや。山はのほりて上求菩提の機をす
すめ。海は下りて下化衆生の相をあらはし。五濁の水は實相無
漏の大海となつて。花ふり異香くんじつく。相好まことに肝に
めいじ。感涙うでをうるほせば。はや明けゆくや春の夜の。は
や明方の雲ののりて。虚空よあがらせ給ひけり。

張良

ちやうりやう

信光作

ワキ詞「是は漢の高祖の臣下張良とはわが事なり。われ公程に隙

五更 今の午前四時ごろ。

なき身なれども。或る夜ふらふの夢をみる。是より下邳と云ふ所
に土橋あり。かの土橋に何となくやすらふ所に。一人の老翁馬
上にて行き逢ひ。かの者左の沓を落し。某に取りて履かせよと
いふ。何者なれば我にむかひ。かく云ふらんと思ひつれども。
かれが氣色只ものならず。其上老いたるを貫ひ親と思ひ。沓を
取つてはかせて候ふ。其時かの者申すやう。汝誠の志あり。今
日より五日に當らん日こゝに來れ。兵法の大事を傳ふべきよ
申して夢さめぬ。やうく日を考へ候へば。今日五日に相當り
候ふ程に。唯今下邳の土橋へと急ぎ候ふ。道行「五更の天も明け
行けば。時やれうきと行く程に。道は遙かに山の端も。ちらみ
渡れる川波や。下邳の土橋に着きけり。
シテ「あら遅なはりやいかに張良。年老いたるものと契りれき。
其言の葉もはや違ひぬ。詞「我は先刻よりこゝに來り。曉鐘を

杉の門 門に倚りて待つ意にて
下文につゞけたり。

かぞへ待ちつるに。はや其時刻も杉のかど。地「待つかひもな
はや歸れ。汝誠の志。あらばけふより五日に。當らん其日夜
ふかく。來らば我もまたこゝに。かならず出で逢ひ。約束の如く
傳へん。れくれ給ふな張良と。怒りをなして老翁は。かきけす
やうに失せにけり。

ゆくへも知らぬ。誰とも素性と
知らぬ人の意。

瑞雲霧縹一聲之玄鶴喚天。巴峽
秋深五更之哀猿叫月。期
集の文。瑞雲は夏の祭王の
玄鶴は年老いて色黒く爲りたる
地。さしと盛なりし瑞雲も今は
霜落ちて結の聲がさびしきと云
ふ。巴峽は深山にて猿の名所。哀
猿は哀しげになく猿。秋ふけ
深山の月に映かけて猿の聲は
はくものすさまじきと云ふ。こゝに
は曉のけしきの形容に用ふ。

山のさひ 山の間。谷間の處。

ワキ詞「言語道斷。以ての外の機嫌にて候ふは如何に。又我なが
ら斯くの如く。ゆくへも知らぬ御事に。かやうに恐れ従ふ事。
其故なきには似たれども。大事を傳へて末世にのこし。兵法の
師といはれんと。地「思ふ心を見んためと。知れば歸るも恨みな
し。又こゝろこゝに來らめと。勇みをなして歸りけり。
後ワキ一聲「瑞雲霜滿てり。一聲の玄鶴空に鳴く。巴峽秋深し。五
夜の哀猿月に叫ぶ。もの冷まき山路かな。地「有明の月も隈な
き深更に。山のかひより見渡せば。所は下邳の川波に。渡せる

緒つ潮の 願ひの滿つるを潮に
云ひかけたり。また舟に入る潮
水の事とあり。潮ふれば潮の
曉さつとけたり。

諸佛も感應 佛たちも張良の忠
義に感應あつて目前に願を叶は
せ給ふなり。

いしくも。いみじくもに同し。
雲だの意。

橋にれく霜の。白きをみれば今朝はまだ。渡りし人の跡もなし。
うれしや今ははや。思ふ願ひも滿つ潮の。曉かけてはるかに。
夜馬に鞭うつ人影の。駒をはやむる氣色あり。
後シテ「抑是は。黄石公と云ふ老人なり。詞「こゝに漢の高祖の臣下
張良と云ふ者。たゞ公程をみて君臣をれもんじ。義を全うして
心たけく。賢才人に越え。器量すぐれ。地「國を治め民をあはれ
む志。シテ「天道に通じて忽ちに。地「諸佛も感應目のあたり。シテ
「大事を傳へて高祖につかへ。地「敵を平らげ味方をいさめ。天
下を治めん謀。汝に傳へんと。駒をはやめて來り給ふを。張良
はるかに。見奉れば。ありしに替れる石公の粧ひ。眼の光りも
あたりを拂ひ。姿もかくやく威勢に恐れて。橋本にかゝこまり
待ち居たり。
シテ詞「いかに張良。いしくも早く來るものかな。近づき給へ物

氏物語にて名高き夕顔の巻にも
嵯峨の地。山城國葛野郡。嵐山の麓
清涼寺。禪堂のある寺。
みんひらき。落つるを云ふと最
大夫進。替へたる武者詞。進
は中宮少進の略稱。
鏡山。近江の名所。
不破の關。美濃の關にあり。
花の跡訪ふ。松風や吹き落花と吹く
の道にて。落花と吹き落花と吹く
朝長に比し。落花と吹き落花と吹く
行末の頼み。たきと比したるな
青墓の長者。長者は兼族などの
意。こゝは女みづから兼族と述
はかなき心の。身の上。直接の
關係なき露や泡と見ても。無常
を觀するが人情の習慣なるにの
意。は。な。き。は。つ。ま。ら。ぬ。何。で
も。な。き。か。り。う。め。なる。な。ま。の
花薄。花の袖など云ひて袖の美
しさを花に譬ふる事あれば。私
に。出。だ。す。べ。き。言。の。葉。も。泣。く。ば。か。り。なる。有。様。か。な。歌。光。り。の
て。は。云。ふ。べ。き。言。葉。も。無。き。と。云。ふ。出。ま
光りの陰を。いはゆる光陰にて
雪の内に春は來にけり。露の氷れる
月日の春は來にけり。露の氷れる
涙今や解くらん。古今集の歌。
て。目。前。の。け。し。き。を。呼。び。起。す。て。次。の。解。り

長の御ゆかりの者よて候ふほどよ。急ぶ彼所より下り。御跡をも
吊ひ申さんと思ひ立ちて候ふ。道行「近江路や。瀬田の長橋うち
わたり。猶行くすゑは鏡山。老曾の森を打ち過ぎて。未し伊吹
の山風の。不破の關路を過ぎ行き。青墓の宿より着きよけり。
シテトモ次第「花の跡訪ふ松風や。雪よも恨みなるらん。シテ「是は
青墓の長者よて候ふ。シテトモ「うれ草の露水の泡。はかなき心の
たぐひよも。哀をえるは習ひなるよ。是は殊更思はずも。人の
なげきを身のうへよ。かゝる涙の雨とのみ。をざるよ袖の花薄。
穂よ出だすべき言の葉も。泣くばかりなる有様かな。歌「光りの
陰を惜めども。月日の數は程ふりて。雪の内春は來にけりう
ぐひすの。氷れる涙今ははや。解けても寝されば夢だよ。御
面影の見えもせて。痛はかりあり有様を。思ひ出づるもあさま
しや。

解けても寝されば。悲傷のあま
にも見えずなり。
御めのこと。乳母と云ふが本にて。
主君の守り役なる男と云ふ。
かやうの姿と。體をさ為りたる
抖擻。梵語には顛帖と云ふ。唐
土にて抖擻と稱す。衣を脱ぎ住
處にも意にかけず。皆拂ひ捨て
て。佛道のみ専心に修行する体
と云ふ。
行脚。旅に往來して居所
不仕の姿と云ふ。特別の
取り分きたる御なじみ。特別の
御頭菜と云ふ。はりあひなく。はか
あなく。なごの意。

シテ詞「ふらぎやな此御墓所へ我ならでは。七日々々よ参り。御
跡吊ふものもなきよ。旅人と見えさせ給ふ御僧の。涙をなが
懇よ吊ひ給ふは。如何なる人よてまゝですぞ。ワキ詞「さん候ふ
是は朝長の御ゆかりの者よて候ふが。御跡吊ひ申さんため是ま
で参りて候ふ。シテ「御ゆかりとはなつかしや。さて朝長の御た
め如何なる人よてまゝですぞ。ワキ「是は朝長の御めのと何某と
申す者よて候ひしが。さる事有つて御暇たまはり。はや十箇年
も餘り。かやうの姿となりて候ふ。とくよも罷り下り。御跡吊
ひ申したくは候ひつれども。怨敵のゆかりをば。出家の身をも
許さねば。抖擻行脚よ身をやつし。忍びて下向仕りて候ふ。シテ
「扱は取り分きたる御なじみ。さこころは思ひ召すらめ。わらはも
一夜の御宿りに。あへなく自書し果て給へば。たゞ身のなげき
の如くよて。かやうよ吊ひ参らせ候ふ。ワキ「實は痛はかりや我と

思ひの玉の 買盛に出し。

時人々 光陰可憐。時不待
時人の語より取る。

朝有紅顔二世路。暮為三白
世間の無常を觀して。けさまで
紅顔もして人に誇りし身も夕方の
骨と化して野原に朽ち果つる
源平左右にして。 朝廷の左右に
並び仕へてなり。

も。偏ひとへ法の力ごと。思ひの玉の數くりて。シテ「聲を力にたよ
りくるは。ウキ」まことの姿か。シテ「まほろーかど。ウキ」見えつ。
シテ「かくれつ。ウキ」れもかけの。歌「あれはとも。いはゞ形かたちや消
えおまゝ。きえずはいかで燈を。背くなよ朝長を。共にあはれ
みて深夜よみよの月も影うひて。光陰を惜おぼみ給へや。げにや時人ときびとを。
待たぬ浮世うきよのならひなり。唯何事もうち捨てよ。御法ごぼうを説かせ
給へや。

シテ「リ」それ朝あしたに紅顔こうがんあつて。世路よぢにほこるといへども。夕ゆふには
白骨びやくこつとなつて郊原かうげんに朽ちぬ。サシ「昔は源平左右げんへいさゆうにして。朝家あさけを
守護しゆごし奉り。御代ごよを治め國家こくがをまづめて。萬機ばんきのまつりごとす
なほなりーに。保元平治へいげんへいぢの世のみだれ。いかなる時か來りけん。
シテ「思はざりーに弓馬きうまのさわざ。ひとへは時節ときせふ到來なり。クセ
「なる程なるほどは嫡子ちやくし源源太義平げんげんたいぎへいは。石山寺いしやんじよこもりーを。多勢たせい無勢むせい

源平兵衛 大納言頼盛の郎等宗
清の事。

長田 平忠致。

頼む木よりぎのよきに。雨あめを避よこげん
たすて立ちよる木陰きかげの隅すみり出
ひがひなきと。頼みたる長田ながたのい
やみくさ。むじくさ。さん
さんに。などの意。

一切いっけつの男子なんしをば。一切いっけつ男子なんし即すなはち
慈父じふ。一切いっけつ女人にょにん即すなはち母ははと經文きやうもんに
まへり。

一乘いちじやう 法華經ほふけきやうと云ふ。成佛じやうはつの乘
物ものは。一いちに法華經ほふけきやうに限るの意。

かなはねば。力なく生捕なまとらられて。終すまに誅つゐせられにけり。三男兵
衛へいゑの佐すけをば。源平兵衛げんへいへいゑが手てよわたり。是も都みやこへぞ捕とらられける。
父義朝ちちぎともは是こゝろよりも。野間ののまの内海うちうみよ落ちゆき。長田ながたをたのみ給へ
ども。頼む木よりぎのよとよ雨あめもりて。やみくさど討うたれ給ひぬ。い
かなれば長田ながたは。ゆひかひなくて主君しゆくんをば。討うち奉るほうるほうや。如
何いかんなれば此宿このやどの。あるむはあかも女人にょにんの。かひくくも頼ま
れて。一夜ひとよの情なさけのみか。かやううよ跡あとまでも。御用ごんひひなる事は。
シテ「うもくいつの世の契ちぎりぢや。一切いっけつの男子なんしをば。生なまくなまの父
と頼み。萬よろの女人にょにんを。生なまの母ははと思へとは。今身いまみの上うへよ知られ
たり。さながら親子おやこの如ごとくよ。御ごなげきあれば吊たひも。誠まことよ深
き心こゝろざ。請こゝろけよろこび申まをすなり。朝長あさながが後生あとせいをも御心ごんやすく
れほめせ。
ロンギ地ろんぎぢ「げに頼むべき一乘いちじやうの。功力こうりきながらよなどこれば。いまだ

べいと。泣きかなみみて制すれば。シテ「のうれ主の命に代る事。弓矢取る身の習ひなり。美女「悲しやな互に争ふ命のきは。幸毒「幸毒もすしみ。美女「美女も立ちよる。幸毒「かなたは主君。シテ「此方は思ひ子。美女「中よてなかく。シテ「仲光が。地「身は是程惜しからじ。何とかせまうとやあらんと。猛き心よも。弱り果てたるけしきかな。

しらす手。まゆみと云ふ木にて作れる弓。しらすは其色の形容。知らずと受けてゆん手と呼び出さす。左の手を云ふ。ゆん手。弓の要に連ふ親のめと常に指に響へ云は。こゝも其意に云ひ。いりて射と風の間に響けてわやさす。

美女「親よだよ。惜まれぬ身を何とたゞ。あゝ思ふらん中々に。情のつらさ如何ならん。幸毒「情は人の爲ならじ。今此きはの御命に。代り申さずは。弓矢の家の名を惜しき。地「かなたこなたも幼き。御身よだよも理の。或はれ主子は惜しき。主君をばいかで手よかけんど。心よわーやゑらま弓。ゆん手よ有るは我子ぞと。思ひ切りつゝ親心の。聞計よ現なき。我子をゆめとなしけり。狂言「シカク。シテ詞「げよく汝が申す如く。某が心

いしくもいしくもに同下。わつばれておしたと云ふ意。

元結切り。出来になる事。失せて候ふ。家と出でたる事。

中さつゝ候へ。又美女御前を御供申し。何方へも立ち退き候へ。シテ詞「如何し申し上げ候ふ。美女御前を討ち奉りて候ふ。彌仲詞「いしくも仕りたるものかな。さこう最期の未練よ有りつらん。シテ「いやさは御座なく候ふ。某太刀抜き持つて。少しためらひ候ふところに。やあいかし仲光れくれたるかど。是を最期の御言葉にて候ふ。彌仲「いかに仲光。れこと存じの如く。總じて美女ならで子と云ふ者なし。今日よりしては汝が子の幸毒を一子と定むべし。急いで呼びいだし候へ。シテ「其御事にて候ふ。美女御前の御別を悲しみ。元結切り暮に失せて候ふ。同じくは仲光にも御いとま賜はり候へ。様替へばやと思ひ候ふ。彌仲「心強くは云ひつれども。さぞ思ふらん美女丸をも。我子の如く手馴れしに。二人の者に別るし思ひ。地「よーや王土にすむ習ひ。

惠心の僧都 寛仁元年七十六歳にて寂したる人。僧都は僧官の名。四位の取上人に准すと見ゆ。先々此方へ渡り候へ。美女丸に云ふ詞。

御下向 京都より下る事。初も幸壽が幸に候ふ。氣の毒の次第なりと云ふ意。

貴命は誰ものがれぬぞと。仲光をどにかくに。すかゝ給ふぞよ
一なき。げにや親子の道なれば。あはれとや又思ひ子の。跡と
ふ法の事業を。營み給ふあはれさよ。
ワキ詞「是は比叡山惠心の僧都にて候ふ。扱も去る子細候ひて。
只今多田の満仲の御所へと急ぎ候ふ。先々此方へ渡り候へ。い
かに案内申し候ふ。シテ詞「誰にて渡り候ふぞ。や。惠心の僧都
の御下向にて御座候ふよ。ワキ「いかに仲光。扱も幸壽が事は候
ふ。まづ某が参りたる由御申し候へ。シテ「心得申し候ふ。如何に
申し上げ候ふ。惠心の僧都の御出でにて候ふ。満仲「あら思ひよ
らずや。先々此方へと申し候へ。シテ「畏つて候ふ。此方へ御入
り候へ。ワキ「心得申し候ふ。満仲「さて只今は何の爲の御いで
て候ふぞ。ワキ「さん候ふ只今参る事餘の儀に非ず。美女御前の
御事を申さん爲に参りて候ふ。満仲「うの事にて候ふ。餘りにふ

三世の主君 君臣の縁は過去現在未來の三世に渡る云ふ。

引きつれに同す。

領掌 承掌に同す。これは猛き心家が承掌するの意。もろこし漢仙家に入りし身の意。もろこし漢の末に既蒙と云ふ天台山人に於りて女子に逢ひたるかののち家に歸りて見れば既に七世を絶たしと云ふ古事。猛の名。たゞ達の文字と云ひかけたるのみ。

いざの者にて候ふ程よ。仲光に申し付け失ひて候ふ。ワキ「其事にて候ふ。まづ御心をづめてきてこゝめされ候へ。美女御前を失ひ申せとの御使いきりぬり。仲光心に思ふやう。いかで三世の主君を手懸け申すべきと思ひ。我子の幸壽が首を切り。美女と申して御目にかけて候ふ。されば我子の代へて思ふ程の美女御前の御不審免はれはませと。美女を引きぐり満仲の御前にこゝろ参りけれ。満仲詞「さればこゝろ猶未練なる美女なりけり。幸壽を殺さば諸共よ。などや自害よ及ばざる。ワキ詞「いやいや諸事をさゝ置きて。幸壽が佛事と思へり。美女を助けてたひ給へど。涙を流し申じければ。地「猛き心もよわくと。はや領掌を申しけり。仲光餘りのうれさよ。御盃や菊の酒。仙家よ入りし身の。七世の孫よ逢ふ事も。たどへならずや親子の。一世のちざりの二度逢ふぞうれしき。シテ「親子鸚鵡の盃

今は期を待つ 死期を待つと云ふ

色を盡して 品を盡して 種類を盡して

わがせこが来べき管なりさうがに蜘蛛のふるまひのわがせこが来べき管なりさうがに蜘蛛のふるまひのわがせこが来べき管なりさうがに蜘蛛のふるまひの

「こなたへ来れと申し候へ。」「畏つて候ふ。此方へ御参り候へ。」「いかし申し上げ候ふ。典薬の頭より御薬を持ちて参りて候ふ。御心地は何と御入り候ふぞ。」「昨日より心もよわり身も苦みみて。今は期を待つばかりなり。」「いやくそれは苦くならず。病ふは苦き習ひながら。療治よよりてなほる事。ためしは多き世の中。」「思ひもすてす様や。」「色をつくいて夜晝の。境もいらぬ有様の。時のうつるをも。ればえぬほどの心かな。げや心を轉ぜず。其まゝ思ひ沈む身の。胸を苦むる心となるぞ悲しき。」「シテ一聲「月清き夜半とも見えす雲霧の。かれば曇る心かな。」「いかし頼光。御心地は何と御座候ふぞ。」「ふしやな誰ともあらぬ僧形の。深更に及んで我を訪ふ。其名はいかればつかな。」「シテ「愚の仰せ候ふや。惱み給ふも我せしが。来べき宵な

たこなひこひしるしと云ふ。古今集序の古註に右の文句に直して引きたり。是は尤も天女の御愛ありし衣通姫云ふまれのしなり。御幸と侍心にて寄來給ふべき前光は蜘蛛の所爲にあらばれたりの人。蜘蛛の所爲を知る占の當時にありしならん。五体二手足。後と見する處やうむくる處と。足も止まらせずの足も止まらせずの。得たりやたうと。隣り隣りたる聲のしめたさいふ位の詞。御聲の高く。いみづくもに同す。

りさゝがよの。」「蜘蛛のふるまひかねてより。知らぬといふは猶ちかづく。姿は蜘蛛の如くなるが。」「かくるや千筋の糸すぢよ。」「五体をつゞめ。」「身を苦むる。」「地「化生と見るよりも。枕もあり膝丸を。抜きひらきちやうと切れは。うむくる所をつゞけさまよ。足もためずなごせつ。得たりやれうどのよめる聲。形は消えて失せよけり。」「リキ詞「御聲の高く聞え候ふほどは馳せ参じて候ふ。何と申したる御事よて候ふぞ。」「いしくも早く来たる者かな。近う来り候へ。語つて聞かせ候ふべし。扱も夜半ばかりの頃。誰とも知らぬ僧形の来りわが心地をどふ。何者なるぞと尋ねし。我せしが来べき宵ありさゝがよの。蜘蛛のふるまひかねてゐる。といふ古歌をつらね。即ち七尺ばかりの蜘蛛となつて。我に千筋の糸をくりかけしを。枕にあり膝丸にて切りふせつるが。

御太刀つけ 太刀にて切り付け
此血とたんだへ 此血を認め行
きの意。

土も木もわが大君の國なればいづ
くも鬼のつくろひなるべき
太平記にある歌。但し初句は草
も木もさあり。

一人武者 隨一の武者。
下知 命令に同ト。

化生の者としてかき消すやうに失せしなり。是と申すもひとへに
劍の威徳と思へば。今日より膝丸を蜘蛛切と名づくべし。なん
ほう奇特なる事にては無きか。ワキ「言語道斷。今に始めぬ君の
御威光劍の威徳。かたぐし以てめでたき御事よて候ふ。また御
太刀つけのあとを見候へば。けしからず血の流れて候ふ。此血
をたんだへ化生の者を退治仕うするよて候ふ。頼光「急いで参り
候へ。ワキ「畏つて候ふ。

ワキ一聲「土も木も我大君の國なれば。いづくか鬼のやどりなる。
其時一人武者すくみ出で。彼塚にむかひ大音あげていふやう。
是は音にも聞きつらん。頼光の御内よ其名を得たる一人武者。
いかなる天魔鬼神なりとも。命魂を断らん此塚を。崩せや崩せ
人々ど。呼ばりりさけぶ其聲に。力を得たるばかりなり。地「下知
よ従ふ武士の。塚をくづし石をかへせば。塚の内より火焰をは

なち。水をいたすといへども。大勢くづすや古塚の。あやうき
岩間の陰よりも。鬼神の形は顯はれたり。

後シテ「汝いらすや我むかひ。葛城山一年を経し。土蜘蛛の精魂
なり。猶君が代に障をなさんと。頼光に近づき奉れば。かへつ
て命を断たんとや。ワキ「其時ひとり武者すくみ出で。地「其時一
人武者すくみいで。汝王地よ住みながら。君を憐ます其天罰
の。劍よあたつて憐むのみかは。命魂をたよんと。手よ手を取
り組みかくりければ。蜘蛛の精靈千筋の糸を繰りためて。投げ
かけく白糸の。手足よまどはり五体をつめて。蹠れ伏して
ぞ見えたりける。ワキ「然りとはいへども。地「あかりとは云へど
も。神國玉地のめぐみを頼み。彼土蜘蛛を中にとりこめ。大勢
みだれかくりければ。劍の光よ少くもるる氣色を便りに。切
りふせく土蜘蛛の。首打ちれと悦びいさみ。都へとてこそ

神國玉地 神の御國。天皇の御
國なれば。其御威光によりて退
治すべまの意。

都へてころ 葛城山は大和な
れば京都の頼光の館に歸ると云

なかりなりし。却つて契りの
 無かりし方。しならん意の
 唐帝の支宗。皇帝と指す。
 驪山宮の私語。唐帝の支宗。皇帝と指す。
 人にならぬ。私語の洩れし
 あだなるつゆの。私語の洩れし
 起れり。つゆの。私語の洩れし
 芽生さつ。つゆの。私語の洩れし
 すれぬ。つゆの。私語の洩れし
 風行柳に。つゆの。私語の洩れし
 風土の古事。つゆの。私語の洩れし
 人國まで。つゆの。私語の洩れし
 見感する。つゆの。私語の洩れし
 けたり。つゆの。私語の洩れし
 なき世を。つゆの。私語の洩れし
 人後事。つゆの。私語の洩れし
 是に。つゆの。私語の洩れし
 人に。つゆの。私語の洩れし
 居る。つゆの。私語の洩れし
 にか。つゆの。私語の洩れし
 月都。つゆの。私語の洩れし
 星合。つゆの。私語の洩れし
 むれ。つゆの。私語の洩れし
 舟の。つゆの。私語の洩れし
 水。つゆの。私語の洩れし

煙よのこる面影も。ツレ「見は程なきあはれの色。地」なか／＼
 なり／＼ちざりかな。クセ「唐帝の古へも。驪山宮の私語。洩れ／＼
 始めを尋ぬるよ。あだなるつゆの浅茅生や。袖は朽ちよ／＼秋の
 霜。わすれぬ夢を訪ふあら／＼の。風がつてまで身よ／＼める心な
 りけり。ツレ「人の國までとぶらひの。地」哀を知れば常ならで。
 なき世を思ひのかず／＼に。餘りわりなき戀心。身をくだきて
 もいやま／＼の。戀慕のみだれなりとかや。是はさすが／＼同じ世
 の。頼みも有明の。月の都の外までも。叡慮にかゝる御恵み。
 いともか／＼こき勅なれば。宿はと問はれて無／＼とはいか／＼答へ
 ん。
 ロンギョテ「是までなりやさらばとて。直のれ返事たまはり。御暇
 申し立ち出づる。ツレ「月よ訪ふ。宿りは假の露の世よ。これや
 限りの御使ひ。思ひ出の名残ぞと。慕ひて落つるなみだかな。地

とひきさむ。むべき言の葉もな。シテ「言の葉もあき君の御こ
 源氏物語の。吹きさむ。むべき言の葉もな。シテ「言の葉もあき君の御こ
 初めに吹く。吹きさむ。むべき言の葉もな。シテ「言の葉もあき君の御こ
 調子に合はす。吹きさむ。むべき言の葉もな。シテ「言の葉もあき君の御こ
 べき言の葉もな。吹きさむ。むべき言の葉もな。シテ「言の葉もあき君の御こ
 なり。吹きさむ。むべき言の葉もな。シテ「言の葉もあき君の御こ
 めん言の葉もな。吹きさむ。むべき言の葉もな。シテ「言の葉もあき君の御こ
 物思ふに。吹きさむ。むべき言の葉もな。シテ「言の葉もあき君の御こ
 舟舞に。吹きさむ。むべき言の葉もな。シテ「言の葉もあき君の御こ
 うれし。吹きさむ。むべき言の葉もな。シテ「言の葉もあき君の御こ
 古今集の。吹きさむ。むべき言の葉もな。シテ「言の葉もあき君の御こ
 今に。吹きさむ。むべき言の葉もな。シテ「言の葉もあき君の御こ
 ひに。吹きさむ。むべき言の葉もな。シテ「言の葉もあき君の御こ
 くの。吹きさむ。むべき言の葉もな。シテ「言の葉もあき君の御こ
 云へり。吹きさむ。むべき言の葉もな。シテ「言の葉もあき君の御こ

「涙もよ／＼や星合の。今は稀なる中なりと。ツレ「終は逢ふ瀬はほ
 どあらじ。むかへの舟車の。やがてこつ参らめと。い／＼と名残
 の心とて。シテ「酒宴をなして糸竹の。地」聲すみわたる月夜かな。
 シテ「月夜よ。ツカ「こがら／＼よ。吹きあはすめる笛の音を。
 地」ひきさむ。むべき言の葉もな。シテ「言の葉もあき君の御こ
 ろ。地」われらが身までも物思ひに。立ち舞ふべくもあらぬ心。
 今は却りてうれ／＼ささ。何れ包まん唐衣ゆたかに。袖うちあは
 せ御暇申し。い／＼心もいさめる駒よ。ゆらりとうち乗り。歸
 る姿のあとはる／＼と。小督は見れくり仲國は。都へとてこつ
 歸りけれ。

大原御幸 れはらごかう

元清作

大臣詞「是は後白河院の仕へ奉る臣下なり。扱も此度先帝二位殿

池水に汀の櫻ちりしきて波の花こ
 白河院の御製なり。柿の花盛は
 過きて今は波上の花盛なる意。
 緑の山。遠景と形容せしなら
 一字。軒に同下。
 破れては。障子の瓦の破れた
 まなり。障子の瓦の破れたま
 に入ると得へし。
 不測の意。障子の代りに香と
 見たり。障子の代りに香と
 とは。障子の代りに香と
 月もまた常住の月。月の永久の燈
 月もまた常住の月。月の永久の燈
 月もまた常住の月。月の永久の燈

幸をはやめ申候ふ間。大原に入御候ふ。かくて大原に御幸な
 つて。寂光院の有様を見わたせば。露むすぶ庭の夏草一げりあ
 ひて。青柳系をみだつ。池の浮草波にゆられて。錦をさら
 すかと疑はる。岸の山吹咲き亂れ。八重たつ雲の絶間より。山
 時鳥の一聲も。君の御幸を待ち顔なり。法皇「法皇池の汀を觀覽
 あつて。池水に汀の櫻ちりしきて。波の花こる盛なりけれ。地「舊
 りにける。岩のひまより落ちくる。水の音さへよありて。緑
 蘿の垣。翠黛の山。繪にかくとも筆にも及びがた。一字の御
 堂あり。薨破れては霧不斷の香を焼き。扉れちては月も又。常
 住の灯をかぐとは。かゝる所か物すぞや。
 法皇「是なるこそ女院の御庵室にてありげに候ふ。軒には葛朝
 顔はひかくり。藜翟ふかく鎖せり。あら物すこの氣色やな。い
 かに此庵室の内へ案内申候ふ。阿波内侍「誰にてわたり候ふぞ。

信西 少納言通意入道して信西
 と稱す。

「是は萬里の小路の中納言にて候ふ。阿波内侍「うればさて人
 目まれなる山中へは。何とて御わたり候ふぞ。ワキ「さん候ふ女
 院の御住居御訪ひの爲。法皇是まで御幸にて候ふ。阿波内侍「女院
 は上の山へ花つみに御出でにて。今は御留守にて候ふ。ワキ「御
 幸のよ一申候へば。女院は上の山へ花つみに御出でにて。
 今は御留守のよ候ふ。暫く此所に御座をなされ。御歸りを御
 待ちあらうずるにて候ふ。法皇「やあいかの尻前。汝はいか
 なる者ぞ。阿波内侍「げに御見忘れは御ことわり。是は信西が
 娘。阿波の内侍がなれる果にてさむらふ。かくあさましき姿な
 がら。明日をも知らぬ此身なれば。恨みとは更に思はずさむら
 ふ。法皇「女院はいづくに御わたり候ふぞ。阿波内侍「上の山へ花
 つみに御出でにて候ふ。法皇「さて御供には。阿波内侍「大納言の
 局。今少一待たせれば一ま候へ。やがて御歸りにて候ふべし。

種重悪人云々 往生要集の文句。極めて重き罪惡の人と云ふには他の方便なし。唯彌陀の名と稱へさへしたるは極樂に生まると成等正覺の意。成佛と云ふに同す。

組づたひ 峻しき山道と云ふ。

花がたみひちに 妻木にわらび。述に前文に應ず。首尾全し。

圓淨 此世と云ふ。

法の人 法皇と指す。

同じ道に 女院も法皇も共に御法体なれば云ふ。一念佛と一返する事。攝取の極樂へとせよ取る。念佛と十返する事。

シテヤシ「昨日もすぎ今日もむなしく暮れなんとす。明日をも知らぬ此身ながら。唯先帝の御面影。忘るくひまはよもあらじ。極重悪人無他方便。唯稱彌陀得生極樂。主上を始め奉り。二位殿一門の人々。成等正覺。南無阿彌陀佛。詞や。庵室のあたり人音の聞え候ふ。大納言局「おぼらく是に御休み候へ。」

阿波内侍「只今こころの組づたひを女院の御歸りにて候ふ。法皇「扱何れが女院。大納言の局はいづれぞ。阿波内侍「花がたみひちにかけさせ給ふは。女院にてわたらせ給ふ。妻木にわらび折りうへたるは。大納言の局なり。「いかに法皇の御幸にて候ふ。シテ

「中々に猶妄執の閻浮の世を。忘れもやらで淨名をまた。もらせばもるく涙の色。袖の氣色もつくまへや。地「とは思へども法の人。同じ道にと頼むなり。歌「一念の窓の前に。攝取の光明を期いつく。十念の柴の扉には。聖衆の來迎を待ちつるに。思はざり

聖衆の來迎 佛菩薩の來り迎ふ事。思はざりける。攝取と來迎より外待つ事なかりしに不意の行幸よさなり。草生村の南。近ごろ産生と稱ふる所は古のには非ざる由なり。寂光院の東南に今も清水の小泉あり。月ならで。龍さは云へし月影ならで法皇の御影がうつると云ふ。北祭。賀茂の祭と云ふ。四月なり。

寂光の靜なる 寂光の文字を解。光の陰の事。月日の事。玉松の枝。松と稱して云ふ。光のあきらけき玉とつづけたなり。春から夏にかけて

初花より 金葉集に「夏山の青葉まじりの遅櫻はつ花よりもめづらしきかな」とあると用。柴の扉のしほはしほのあやとす。

ける今日の暮。いれいれに歸るかど。猶思ひ出の涙かな。げにや君こくに。教慮のめぐみ末かけて。あはれもさうな大原や。芹生の里の細道。れぼろの清水月ならで。御影や今に残るらん。ロンギ地「扱や御幸の折もはいかなる時節なるらん。シテ「春過ぎ夏もはや。北祭のきりなれば。青葉にまじる夏木立。春の名残が惜まるく。地「遠山にかくる白雲は。地「散りに花のかたみかや。地「夏草のうげみが原のることなく。分け入り給ふ道の末。シテ「こくとてや。げに寂光の靜なる。光の陰を惜めたる。地「ひかりの影もあきらけき。玉松が枝に咲きうふや。シテ「池の藤波なつかけて。地「是も御幸を。シテ「待ちがほに。地「青葉がくれのれろ櫻。初花よりもめづらかに。中々やうかはる有様を。あはれと教慮にかけまくる。かたむけなや此御幸。柴の扉のしほがほども。あるべき住居なるべしや。